

横須賀における「ブラフ積み擁壁」 に関する研究

- 「海と船が見える坂道」と連携した
ルートミュージアムの地域資源としての可能性-

令和3年5月

吉田 秀樹

横須賀における「ブラフ積み擁壁」に関する研究

- 「海と船が見える坂道」と連携したルートミュージアムにおける地域資源としての可能性-

目次

1. はじめに 横須賀の都市形成とブラフ積み
2. 研究の目的と研究手順
 2. 1. 研究の目的
 2. 2. 研究手順
3. 近代港湾における地形的景観特性と「海と船が見える坂道」「ブラフ積み擁壁」の定義と既往研究等
 3. 1. 地域資源としての近代港湾における地形的景観特性（坂道と石垣）
 3. 2. 「海と船が見える坂道」の定義と既往研究
 - 1) 「海と船が見える坂道」マップと集計表の作成
 - 2) 「海と船が見える坂道」の特性に関する考察(表-3. 1)
 3. 3. 「ブラフ積み擁壁」の定義・構造等
 - 1) 「ブラフ積み擁壁」の定義
 - 2) 「ブラフ積み擁壁」構造
 - 3) 「ブラフ積み擁壁」の石材
 3. 4. 「ブラフ積み擁壁」の事例と既往研究
 - 1)横浜市
 - 2)横須賀市
 3. 5. 絵葉書に見る「ブラフ積み擁壁」
 3. 6. 「ブラフ積み擁壁」と「海と船が見える坂道」の地域資源としての可能性 他地域事例
4. 横須賀における「ブラフ積み擁壁」調査とマップ作成・集計・分析
 4. 1. 調査フロー
 4. 2. 調査内容の説明
 - ①現地踏査の選定
 - ②ルート選定(google 等)
 - ③現地踏査・写真撮影・計測
 - ④紀行文・ブラフ積み擁壁リスト・マップ作成
 - ⑤個別ブラフ積み擁壁データ作成
 - ⑥地区別データ作成
 - ⑦横須賀市内データ集計
5. 他都市の石垣等調査と分析
 5. 1. 「ブラフ積み擁壁」調査 横浜、東京
 - 1)横浜山手
 - 2)横浜のその他
 - 3)三浦半島

4)東京

5)小樽

5. 2. 4 鎮守府都市における石垣

①横須賀港

②佐世保港

③呉港

④舞鶴港

6. 横須賀における「ブラフ積み擁壁」の分析

6. 1. 横須賀の都市形成

6. 2. 横須賀全体の「ブラフ積み擁壁」の特徴

①「ブラフ積み擁壁」数

②石材配置型

③擁壁の目的

④擁壁の傾斜

④規模（延長、段数）と傾斜

⑤寸法比（長手と小口）

⑥石材

⑦施工(目地、丁寧度合)

⑧小口の突出

⑨保存度合い

6. 3. 各地区における「ブラフ積み擁壁」の分析

①若松町・深田地区

②上町地区

③浦賀道①

④浦賀道②

⑤汐入～逸見の谷戸

⑥汐入～坂本の谷戸

⑧田戸台

⑨佐野町

⑩豊島小学校

⑪深田台

⑫観音崎砲台

⑬軍関係施設

6. 4. 地区ごとの比較

6. 5. 他都市との比較 横浜、東京、その他

6. 6. 年代ごとの比較 明治初め、中期、後期、大正、震災、昭和

6. 7. 土地利用ごとの比較 軍、公共、民間、道路、住宅

6. 8. 「海と船が見える坂道」との関係

7. 地域資源としての「ブラフ積み擁壁」に関する提案

7. 1. 横須賀の「ブラフ積み擁壁」の現状 保存状況等

7. 2. 「ブラフ積み擁壁」と「海と船が見える坂道」の地域資源としての可能性

7. 3. 「ブラフ積み擁壁」の保存と活用方法の提案 横浜事例

8. まとめ

横須賀における「ブラフ積み擁壁」に関する研究

- 「海と船が見える坂道」ともにルートミュージアムにおける地域資源としての可能性-

1. はじめに 横須賀の都市形成とブラフ積み

我が国の近代港湾は、水深・静穏域確保のためリアス式地形等に発達した港も多い。その場合、港の開発、工場の立地等による人口増加のため背後の山の斜面に住宅が立地し坂道が発達、あわせて住宅・道路のため石垣擁壁が発達する。これらを港町の地域資源として活用できないか検討することを目的とする。

横須賀市は、幕末時代、ペリー来航後の我が国の外国への開放後、幕府とフランスの技術により、横須賀製鉄所が整備され。その後造船所、海軍鎮守府が設置され港町として発達した。横須賀市においては、坂道は「海と船が見える坂道」が発達し、併せて石垣は「ブラフ積み擁壁」が発達している。「海と船が見える坂道」については、国土技術政策総合研究所資料において、横須賀港を事例にその特性を分析した¹⁾²⁾。今回、横須賀で特徴的な「ブラフ積み擁壁」について現地踏査しマップを作成し、その分布特性を調べた。「ブラフ積み擁壁」については、幕末の開港5港の一つである横浜港山手地区で発達している石垣様式であるが横須賀市においても特徴的な擁壁となっている。

その結果、横須賀市における「ブラフ積み擁壁」は少なくとも157か所あることがわかり、時代、構造物の目的等により特徴があることが分かった。また、「海と船が見える坂道」と「ブラフ積み擁壁」は密接に関係し、横須賀の独特の地域資源であり、歴史と深く関わり、かつ活用の可能性があることがわかった。

2. 研究の目的と研究手順

2. 1. 研究の目的

横須賀において、近代港湾の特徴として発達している「坂道」と「石垣」について、特に「石垣」については横須賀の特徴である、「ブラフ積み擁壁」について、現地踏査しマップを作成し、時代、構造等の目的等からその分布特性を調べ、「坂道」の特徴である「海と船が見える坂道」との関係性を考察し、地域資源としての活用の可能性を探ることを目的とする。

活用のイメージとしては、現在横須賀市で進めている「ルートミュージアム構想」における点と線の地域資源としての活用性である。ルートミュージアムの点であるビジターセンターと拠点Aを周遊する際に線を単なる移動経路だけでなくその線に意味を持たせるために「坂道」と「擁壁」の活用の可能性を探るものである。(図-2.1)

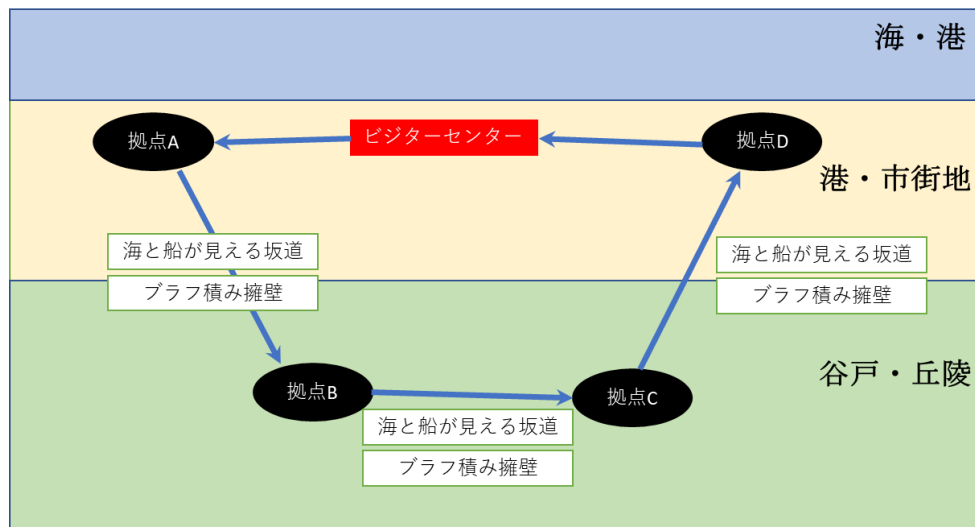


図-2.1 ルートミュージアム構想への活用の模式図

2. 2. 研究手順

研究手順としては、以下のとおりである。

- ・「ブラフ積み擁壁」の定義と既往研究等
- ・横須賀における「ブラフ積み擁壁」調査とマップ作製・集計
- ・他都市の石垣等調査と分析
- ・横須賀における「ブラフ積み擁壁」の分析
- ・地域資源としての「ブラフ積み擁壁」に関する提案
- ・まとめ

3. 近代港湾における地形的景観特性と「海と船が見える坂道」「ブラフ積み擁壁」の定義と既往研究等

近代港湾における地形的景観特性を明らかにするとともに、重要な2つの要素である、「海と船が見える坂道」と「ブラフ積み擁壁」について定義と既往研究等についてまとめた。

3. 1. 地域資源としての近代港湾における地形的景観特性（坂道と石垣）

近代港湾の景観特性として、狭隘な平地に対し人口集中が進み背後丘陵や山岳部の都市化が進み坂道が発達する。あわせて石垣擁壁で住宅用地確保する。特に、港湾地区においては、坂道から港が見えることが特徴であり、またコンクリート擁壁の出現する以前においては、水上輸送により入手の可能な近在の石材を利用した石垣擁壁が発達した。近代港湾の「港町」の地形的景観特性としての「坂道」と「石垣擁壁」が形成される。模式図を図-3.1に示す。

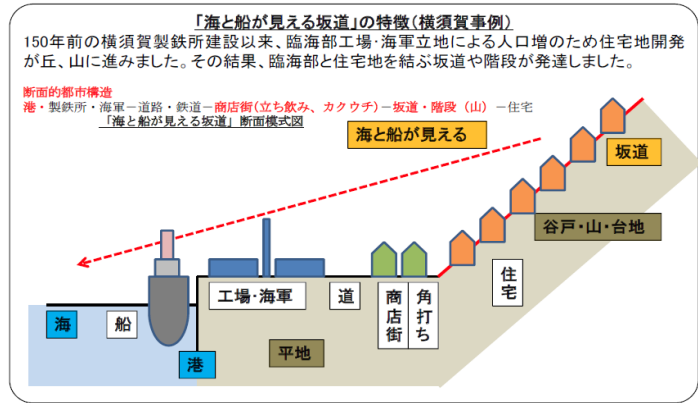


図-3.1 「坂道」と「石垣擁壁」の断面模式図

3. 2. 「海と船が見える坂道」の定義と既往研究

「海と船が見える坂道」の定義として、「現時点において、坂道から坂道を通して、もしくは坂道の視点場から、海や船もしくは海が見える坂道」である。(図-3. 1) 港町の地域資源としての有効であることは、国土技術政策研究所資料¹⁾において報告済である。また日本沿岸域学会においても発表済である。²⁾ 調査概要として横須賀港における「海と船が見える坂道」の特性は、以下のとおりである。

1) 「海と船が見える坂道」マップと集計表の作成

マップについては、横須賀市東京湾側、追浜地区から浦賀地区まで、現地踏査し作成した。12地区で

表-3. 1 各地区の「海と船が見える坂道」の集計表

マップ 番号	地区名	地区の歴史的キーワード	地形の特徴	坂道分類					坂道 風土記 述	坂道の種類		坂道 平均 勾配 °
				①広 域道	②寺 社型	③住 宅地 内坂 道	④台 地・低 地連 絡路	⑤そ の他		斜路	階段 (斜 路含)	
				%	%	%	%	%	%	%	%	
No.0	野島-追浜	海軍航空隊・自動車産業等	谷戸・リアス	0	0	0	50	50	0	50	50	8.5
No.1	追浜-田浦	海軍航空隊・航空技術隊・自動車産業等	谷戸・リアス	0	0	23	69	8	0	38	62	5.9
No.2	田浦-逸見	浦賀道・海軍工廠	谷戸・リアス	27	0	18	36	18	36	45	55	9.7
No.3	逸見・汐入-県立大学	浦賀道・横須賀製鉄所・海軍鎮守府・米軍	谷戸・リアス	18	18	36	27	0	9	0	100	13.3
No.4	県立大学-堀之内	浦賀道・戦前台地開発・埋立	台地	0	0	33	67	0	17	25	75	11.3
No.5	大津-馬堀海岸	戦後住宅開発	台地	8	8	23	62	0	15	54	46	6.2
No.6	馬堀海岸-浦賀	戦後住宅開発	台地	0	0	27	73	0	9	55	45	8.7
No.7	馬堀海岸-観音崎	漁村・砲台	台地	15	15	15	23	31	8	77	23	10.0
No.8	鴨居	戦後住宅開発	台地	0	0	33	56	11	0	56	44	9.3
No.9	東浦賀	浦賀湊・戦後住宅開発	台地・リアス	0	70	10	20	0	20	10	90	25.5
No.10	西浦賀	浦賀湊・戦後住宅開発	台地・リアス	0	33	17	50	0	0	33	67	13.8
No.11	西浦賀-一川間	砲台・戦後住宅開発	台地・リアス	27	0	9	36	27	9	82	18	9.4
全体(No.0-11)				9	11	22	48	10	11	44	56	10.7

凡例; 大きい "+10%" "+10%" "+10%" "+10%" "+10%" "+10%" "+10%" "+10%" "+10%" "+100%"

124の「海と船が見える坂道」があることがわかった。

2) 「海と船が見える坂道」の特性に関する考察(表-3.1)

坂道の分類、勾配、階段の有無等について地区毎に集計分析し、港町の形成史との関係から以下のとおりまとめた。

- ・横須賀製鉄所、鎮守府、海軍航空隊等幕末から戦前のキーワードのある地区は、類型③住宅地内坂道、階段がある坂道の割合が多く、勾配も急な場合が多い。さらに、「坂道風土記」での掲載の割合も高い。(No.1 から No.4)

- ・戦後の住宅開発がキーワードの地区については、類型④台地・平地連絡路型坂道、階段の無い斜路型坂道の割合が多く、勾配もややゆるめで、自動車社会に対応した坂道となっている。(No.5～No.8)

- ・江戸時代からの港町である浦賀については、類型②寺社型坂道の割合が多く、階段坂道でかつ勾配もきつい。(No.9～No.10)

3. 3. 「ブラフ積み擁壁」の定義・構造等

「ブラフ積み擁壁」の定義と構造等を以下にまとめる。

1) 「ブラフ積み擁壁」の定義

「石垣」の積み方には大きく布積み、谷積み、乱積み³⁾があり、「ブラフ積み擁壁」とは、水平方向に石材の長手と小口が交互に配置されるものであり、布積み的一种である。(図-3.2)(写真-3.1) 正面からの見ると、レンガの「フランス積み」に似ている。横浜山手地区に多数分布することから、昭和の終わり横浜市⁴⁾の報告書で「ブラフ積み」と名付けられた。『都市の記憶－横浜の土木遺産』⁵⁾では以下の通り紹介されている。

「外国人居留地としての山手地区は、慶応3年(1867)の開放以来、道路の開削や宅地の造成に伴って各所に大小の崖地が生じ、木柵による土留から順次石積の擁壁へと整備されていった。

その多くは今なお山手地区に現存し、山手地区の主要な景観要素となっている。対岸の房州石を用い、長さ70～80cm、20cm角程度の石材を一本毎控えをとる積み方で、煉瓦積でいえば一段に長手面と小口面とを交互にみせるフランス積に似た積み方をとっている。

在来の間知石積を主流とする伝統的な石積とは異なり、洋風石積の系譜に属すると考えられるが、その出所は明確にしない。山手地区のみならず、横浜市や横須賀にもこの積み方が及んでいるが、山手にちなんで「ブラフ積」という呼び方



図-3.2 石積みの積み方
石積み構造物の整備に関する資料より³⁾

が一般化している。」

なお、「ブラフ」は「崖」の英語である。石材としては、房州石(凝灰質礫岩、凝灰質砂岩)が使われている。

さらに、「ブラフ積み」様式の石垣についての最初の論文⁶⁾は昭和 61 年に見られる。

2) 「ブラフ積み擁壁」構造

構造的には、交互に小口に配置して①擁壁厚を見かけ上厚くすることにより擁壁の背後からの土圧に対する耐力を増加させる工法、②アンカー的役割の工法と考えられる。(図-3.3)

①については、長手と小口の比が、3 対 1 の場合、擁壁の厚さが平均して 25%増しと考えることができる。②については、長手石材背後からの主働崩壊面より背後の部分についてはアンカー効果を考えることができる。(両方とも、図-3.3 における赤点線部分)

なお、レンガ塀のフランス積みのように、長手の石材の後ろにさらに石材を配置する場合もみられる。

3) 「ブラフ積み擁壁」の石材

石材については、横浜山手地区の調査では「房州石」とされている。房州石とは、凝灰質礫岩、凝灰質砂岩であり、加工しやすい石である。一方、三浦半島には、凝灰質礫岩、砂岩として鷹取石、佐島石もある。また、明治初期のブラフ積みについては、真鶴石(安山岩)もみられる。⁷⁾ さらに、戦後の住宅開発における「ブラフ積み擁壁」として、大谷石が使われる例もみられる。



(1)千代ヶ崎砲台(明治中期) (2)汐入小学校(昭和初期)

写真-3.1 ブラフ積み擁壁

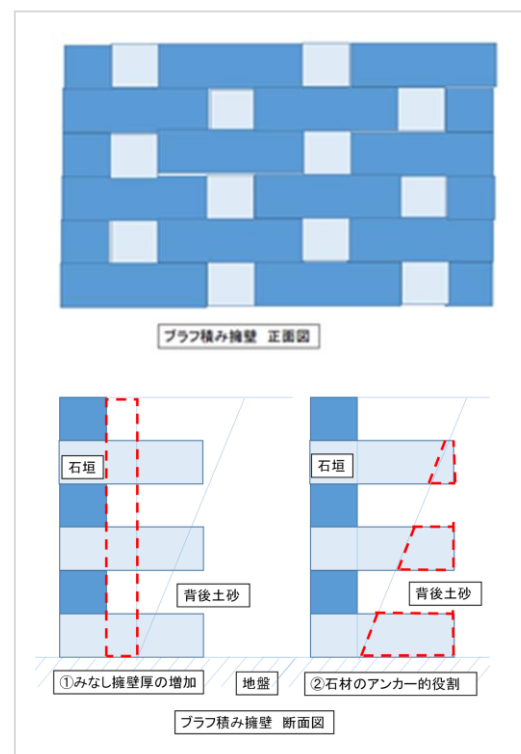


図-3.3 「ブラフ積み擁壁」の構造図

3. 4. 「ブラフ積み擁壁」の事例と既往研究

「ブラフ積み擁壁」は全国的に見た場合、横浜、横須賀などに多い。さらに東京における坂道の石垣にもみられる。以下、各地域での「ブラフ積み擁壁」の状況と既往研究を紹介する。

1)横浜市

「ブラフ積み擁壁」の調査はやはりその名前からわかるように横浜市山手地区において悉皆調査や保存、活用の調査が進んでいる。特に最初に「ブラフ積み擁壁」を命名したのは横浜市である。「ブラフ積み」が初めて出てくる報告書は、「横浜山手 横浜山手洋館群保存対策調査報告書」⁴⁾である。横浜山手の建築物に関する調査報告が主であるが、山手の特徴的景観・構造物として「ブラフ積み擁壁」が出てくる。また、山手地区における「ブラフ積み擁壁」の整備申請許可が明治 13~17 年に出されていると記述されている。その後、横浜市歴史的資産調査会⁵⁾⁸⁾から「ブラフ積み擁壁」が紹介されている。最近では、山手地区の「ブラフ積み擁壁」の分布マップ(図-3.4)⁹⁾が横浜市から作成されるとともに、近年、「ブラフ積み

擁壁」の保存を含む「山手地区都市景観形成ガイドライン」¹⁰⁾「横浜市景観計画（変更にかかる部分）」¹¹⁾として 山手地区にかかる部分が策定されている。

なお、山手地区の「ブラフ積み擁壁」の分布マップ(図-3.4)について、横浜市役所の担当者に問い合わせたところ、「市の公用車で山手地区を巡回したときにその分布を調べたものであり、リスト作成やそれ以上の調査はなされていない。」とのことであった。

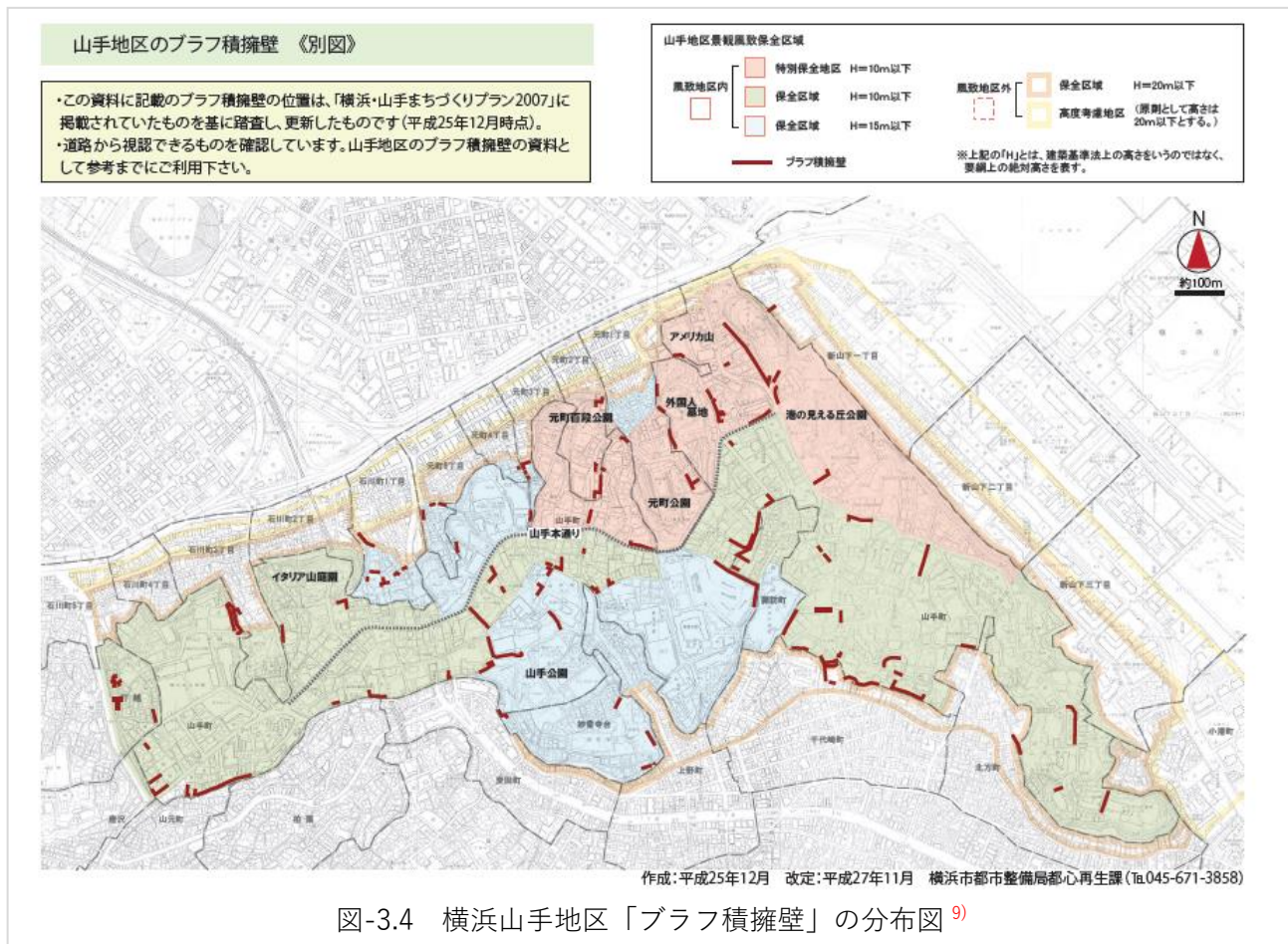


図-3.4 横浜山手地区「ブラフ積み擁壁」の分布図⁹⁾

2)横須賀市

横須賀市にも「ブラフ積み擁壁」が多数存在する。猿島、観音崎砲台、走水トンネル、千代ヶ崎砲台、汐入小学校の擁壁など多数存在する。

ただし、横須賀市および市民において「ブラフ積み擁壁」に対する認識は決して高いとは言えない。逆に観音崎砲台群軍や「浦賀ドック」のレンガ積みのほうが印象強く、レンガの積み方に対する関心は高い。その結果横須賀市内の「ブラフ積み擁壁」に関して悉皆的調査、総合的調査はなされていない。

横須賀市内の「ブラフ積み擁壁」に言及した文献を表-3.2 に示す。横須賀市の「ブラフ積み」についての既往の研究として最初に言及したのは、水野の「日本近代における組積み造建築の技術的研究」⁶⁾においてである。「ブラフ積み」とは呼ばず「1番3番積み」と呼んでいる。次に調査を実施したのは、横須賀市博物館による「横須賀市東逸見町所在石造暗渠調査報告」¹²⁾である。報告書の中で、道路工事に伴う「ブラフ積みの石積み暗渠」にかかる調査と「下町下水処理センター内」への移設復元について述べられ

ている。2003 年には、横須賀市の「横須賀市内近代化遺産総合調査報告書」¹³⁾の中で近代化遺産総合調査の一環として「ブラフ積み擁壁」の地図へのプロットが行われたと報告されているが確認できない。走水トンネルの擁壁が「ブラフ積み」であることはわかる。2005 年には、菊池により横須賀市域における丘陵地の住宅地における擁壁についてブラフ積みについて言及がある。¹⁴⁾ 2007 年には、野内ら¹⁵⁾により「東京湾要塞観音崎砲台跡の現存遺構」の中で「ブラフ積み擁壁」があることが報告されている。具体的には、第 1 砲台、第 3 砲台跡、南門砲台跡、北門谷・南門谷において存在すると報告されている。さらに、森¹⁶⁾により、横須賀市田戸台を中心に横須賀のブラフ積みについて調査し、ブラフ積み石積みから宅地形成過程が研究を

表-3.2 横須賀市内の「ブラフ積み擁壁」に言及した文献

調査報告書名	発行者	年	ブラフ積み存在箇所
日本近代における組積み造建築の技術的研究6)	水野信太郎	1986	2号ドック、深田台(「1番3番積み」)
横須賀市東逸見町所在石造暗渠調査報告12)	安池尋幸ら	2000	東逸見町石造暗渠
横須賀市内近代化遺産総合調査報告書13)	横須賀市自然人文博物館	2003	走水トンネル
横須賀製鉄所・造船所とその更新施設における近代建築技術の導入及びその技術史的展開に関する研究14)	菊池勝弘	2005	丘陵地住宅地
東京湾要塞観音崎砲台跡の現存遺構15)	野内秀明ら	2007	第1砲台、第2砲台跡、南門砲台跡、北門谷・南門谷
ブラフ積みといわれる石積みから見た宅地形成過程を見る16)	森洋子		田戸台、佐野町等
軍都都市横須賀における宅地開発の進展と海軍士官の居住特性17)	双木俊介	2014	上町・中里
近代化遺産・近代遺跡調査概報集7)	横須賀市教育委員会	2017	内浦地区護岸、楠が浦地区海兵団(前面海域突堤、上陸場護岸、短艇釣護岸)、新井掘割護岸、吾妻倉庫水が尻地区護岸、旧湿が谷官舎地区擁壁、旧横須賀海軍工廠長官舎付近擁壁

されている。また、横須賀の上町の宅地開発に合わせたブラフ積み擁壁について双木¹⁷⁾が言及している。2017 年の「近代化遺産・近代遺跡調査概報集」⁷⁾では、米海軍・及び海上自衛隊内内の「ブラフ積み擁壁・護岸」のリストアップがなされている。

既往の研究のレビューから、「ブラフ積み擁壁」の横須賀市内、横浜市内などについて、散発的な調査は行われているが、総合的な調査は行われていないことが分かった。

3. 5. 絵葉書に見る「ブラフ積み擁壁」

今回の研究で横須賀市在住の歴史研究家が保持する戦前の絵はがきにおいて「ブラフ積み擁壁」を調べ表 3-3 にまとめた。横須賀(深田台、汐入、田浦、久里浜)や逗子の公共施設等に「ブラフ積み擁壁」があることがわかる。また、絵葉書については、そのはがきの印刷様式により発行時代を特定できるので、「ブラフ積み擁壁」の整備年代特定に役立つ。

はがきの時代については、3 時代(明治 40 年以前、大正 7 以前、昭和 12 年以前)に分けることができる。

表-3.3 絵葉書に見るブラフ積み

地域	場所	はがき時代
深田台	海軍病院	大7前後
汐入	汐入小学校	大7後
田浦	水雷学校	大7後
	機関(工機)学校	大7前
久里浜	住吉神社	昭8後
逗子	田越川	明40前
	六代御前	大7後
葉山	下山橋	大7後
三崎	遊が崎海水浴場	大7後

3. 6. 「ブラフ積み擁壁」と「海と船が見える坂道」の地域資源としての可能性 他地域事例

本研究において、最終的には「ブラフ積み擁壁」が「海と船が見える坂道」とともにルートミュージア

ムにおける地域資源になる可能性について研究する。これまでこのような研究がなされている事例を調べたが、そのような事例はない。ただし、景観形成において似た事例があり紹介する。

「山手地区都市景観形成ガイドライン」¹⁰⁾である。(写真-3.2) このガイドラインは、令和元年山手地区の魅力ある都市景観を創造するために制定されたもので、山手地区の3地区、「山手町特定地区」「元町特定地区」「石川町準特定地区」の3地区について、「方針、景観形成基準等、行為指針」を定めたものである。「山手町特定地区」については、図-3.5に示す(1)～(8)の8項目からなる。

「(4)見通し景観の確保」においては、「坂道の見通し景観」が、「(6)街並み形成～歴史的街並み形成～」においては、「ブラフ積み等の歴史的土木遺構の保全・継承」が形成基準として挙げられている。

坂道については、「山手町の尾根道の軸線から派生する名前のある坂道から市街地に向けての見通し」が、地区の重要な地域資源として認識されている。ブラフ積みについては、歴史的街並みを継承する形態意匠とされるとともに、ブラフ積み擁壁の景観保全方法について実例を挙げて詳しく説明されている。

このことから、「坂道」と「ブラフ積み擁壁」が、横浜山手地区の景観にとって重要な地域資源であることがわかる。(図-3.6)

横須賀においては、「坂道」が「市街地に向けての見通し」ではなく「海と船に向けての見通し」の「坂道」であること、「ブラフ積み擁壁」が歴史的町並みの形態意匠であり、横須賀の景観形成として、さらには、ルートミュージアムの地域資源として重要な要素になりうるということがわかる。



4-1. 山手町特定地区 (方針・景観形成基準等・行為指針)
(1) 山手町特定地区の基本的な考え方
(2) 方針
(3) 街並み形成～異国情緒ある街並みの継承・ゆとりある閑静な住宅地の形成
(4) 見通し景観の確保
(5) 街並み形成～緑化等
(6) 街並み形成～歴史的な街並みの形成
(7) 街並み形成～駐車場や工作物等の修景
(8) 屋外広告物

図-3.5 山手町特定地区 景観形成方針等

(4) 見通し景観の確保

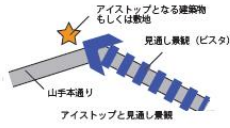
行為指針（都市景観協働地区）

ア 街並み形成に関する事項

(イ) 山手町特定地区の骨格となる山手本通り及び坂道に沿っては、見通し景観に配慮する。

■山手本通り沿いの見通し景観

- 山手地区の骨格となる山手本通り沿いには、アイストップとなる景観上重要な建築物や樹木等が立地している。
- アイストップや、アイストップを視対象とする見通し景観を維持・創出することで、地区の軸としての景観を形成し、来街者も歩いて楽しめる歩行者空間を形成する。
- アイストップとなる歴史的建造物は、地区内のランドマークともなるため、保全する。
- その他のアイストップとなる建築物は、地区の重要な景観を構成するため、形態・意匠などについて、十分に配慮する。



■坂道の見通し景観

- 山手本通りと交わる坂道（谷戸坂、アメリカ山公園に続く坂、代官坂）から周辺の市街地に向けての見通し景観が、地区の重要な景観資源となっている。これらの坂道沿いでは、見通しを阻害しないような建築物・工作物の配置としたり、袖看板や設備等が突出しないようにするなど、見通し景観に配慮する。



「(4)見通し景観の確保」

「坂道の見通し景観」

(6) 街並み形成～歴史的な街並みの形成

景観形成基準（景観計画）

<街並みの形成>

c 道路に面してブラフ積などの歴史的な土木遺構が敷地内にある場合は、積極的に利活用し、擁壁などの工作物は土木遺構の形状を踏襲するなど、歴史ある街並みを継承する形態意匠とするものとする。

■ブラフ積等の歴史的な土木遺構の保全・継承

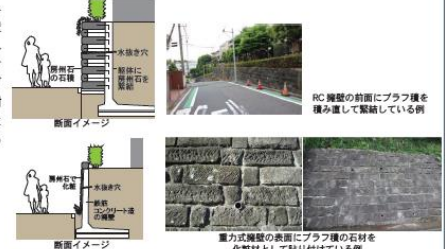
- 山手町特定地区の景観形成に大きく寄与してきたブラフ積等の歴史的な土木遺構は、極力保全すること。
- 安全上の観点などから土木遺構の保全が困難な場合は、土木遺構の素材、石の積み方や形状等を踏襲することで、山手町特定地区らしい歴史ある街並みを継承すること。

【参考】ブラフ積擁壁の景観保全について

「ブラフ積」（P.32 参照）は、この地区の特徴的な景観要素となっている一方、老朽化や構造上の課題から、現状のまま保全することが難しいケースがあります。道路沿いにブラフ積擁壁がある敷地で擁壁を造り替える必要が生じた場合においても、ブラフ積擁壁に用いられていた房州石を再利用して新たな擁壁に造り替えるなど、ブラフ積の意匠を継承する工夫を行っている例があります。

■高さ1mを超える擁壁に活用する場合

ブラフ積を積み直して新たな擁壁と繋結する、もしくは、新たに設ける擁壁の表面にブラフ積擁壁の石材をタイル状にしたものを貼り付ける方法です。



■高さ1m以下の擁壁に活用する場合

既存のブラフ積の位置や規模を変更するなどして積み替えを行い、盛土1m、切土1m以下となる行為で設置する擁壁に使用する方法です。



「(6)街並み形成～歴史的街並み形成～」

「ブラフ積み等の歴史的土木遺構の保全・継承」

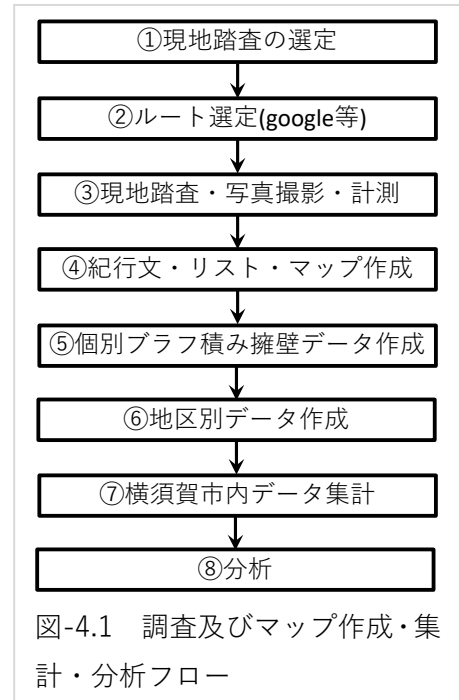
図-3.6 山手町特定地区 景観形成方針(4)(6)

4. 横須賀における「ブラフ積み擁壁」調査とマップ作成・集計・分析

横須賀における「ブラフ積み擁壁」の分布と現状を把握するために、「ブラフ積み擁壁」が存在すると思われる地区を特定し、現地調査した。そのうえでマップを作成し集計分析した。

4. 1. 調査フロー

「ブラフ積み擁壁」調査方法は、「海と船が見える坂道」調査と同様の調査方法で行った。現地調査及びマップ作成・集計・分析フローを図-4.1 に示す。図-4.1 の①から⑧の手順で行った。具体的には、①現地踏査の選定、②ルート選定(google等)、③現地踏査・写真撮影・計測、④紀行文・リスト・マップ作成、⑤個別ブラフ積み擁壁データ作成、⑥地区別データ作成、⑦横須賀市内データ集計、⑧分析である。



4. 2. 調査内容の説明

図-4.1 のフローについて説明する。

①現地踏査の選定

まず現地踏査の選定を行った。「ブラフ積み擁壁」については、横須賀の都市形成の歴史と関わりが強いと考えられることから、重点地区を絞って選定した。選定の視点として以下の6点である。

1. 「戦前」に都市化した地区。特に、「海と船が見える坂道」研究の成果である表-3.1 おいて「住宅内坂道」「階段」が多い逸見地区から県立大学地区（表-3.1 における No2.から No.4）。他の地区については、あまり存在していないことを確認している。
2. 整備主体や整備時代による差を見るため、東京湾要塞や海軍工廠など軍関係の施設。
3. 公共施設として重要な道路である浦賀道沿い。
4. 横須賀と比較するために「横浜山手地区」。



5. 日頃生活している中で、横須賀市内、市外に気になる地点。

6. 半日程度で踏査できる範囲。

選定した現地踏査地点 13 か所及び地区名さらには地域の性格・特徴を図-4.2 に示す。なお、地図には、⑦⑫は、地図外であること、⑬については、地域として地図外もしくは地図中に点在するため地図には示していない。

②ルート選定(google 等)

現地踏査するルートについては、住宅地図及び google マップにより設定した。とくに、google マップについては、ストリートビューがあるので、「ブラフ積み擁壁」の有無を調べするうえで非常に有効であった。

③現地踏査・写真撮影・計測

現地踏査は横須賀建築探偵団(富澤代表)のメンバーと実施した。また、複数で現地踏査後、筆者個人で踏査も実施している。

調査項目は表-4.1 に示すとおりである。ブラフ積み擁壁か否か、小口石材の配置の間隔、ブラフ積みの段数、延長、石材寸法、石材材質、目地の仕上げ、小口突出の有無、施工度合い、保存度合いである。

現地踏査でしかわからない事項については、現地踏査で極力調査・記録することとし、それ以外の項目については、地図、写真、文献

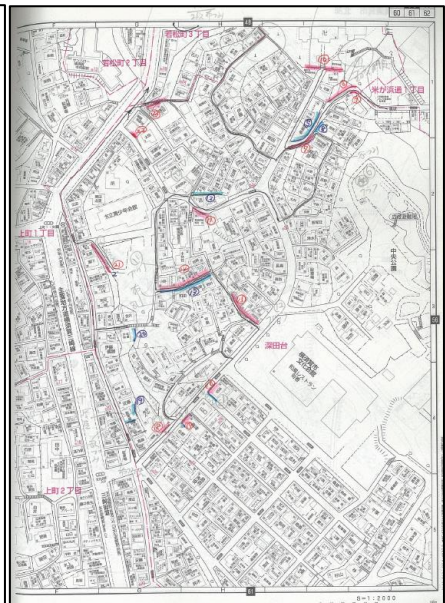
表-4.1 調査項目

調査項目	調査方法(○で実施)				表示例
	現地	地図	写真	文献	
石垣様式	○				ブラフ、布、谷
ブラフ積み様式	○				1+1,2+1(長手数+小口数)
面している場所	○				道路、宅地、階段坂道等
坂道・階段	○				階段、坂
切土・盛土、谷・山	○				切山、盛等
垂直・傾斜	○				垂直、ほぼ垂直、傾斜
石垣段数	○				〇〇段
擁壁高さ	○				〇〇m
擁壁延長	○	○			〇〇m
石材寸法	○		○		〇〇×〇〇×〇〇mm、比〇:〇:〇
石材材質	○		○		房州石、レンガがれき等
目地の様子	○		○		有り、無し
小口面突出度	○		○		有り、無し
施工丁寧度	○		○		◎、○、△、×
軍・官・民間			○	○	海、陸、道路、学校、神社等
整備時期	○			○	明治、大正、震災以降等等
保存度	○		○		◎、○、△、×
その他	○	○	○	○	

地図、写真は google マップも含む

横須賀ブラフ積み紀行文①
 2019(令和1)年7月14日(日)13時~17時
 石本、関、高澤、吉田
 1 今回は横須賀中央駅から平坂途中の龍本寺墓地へ向かうつづりの擁壁でした。縄文時代の平坂人が発見された平坂貝塚は墓地そばのアパートあたりだったそうですが今は確認できません。洋風の青山に続くブラフ積みの層は約高さ約5m、幅12mで石材1本の大きさは860×260。ところどころに「一」の切込みがあり、「金谷の跡本家が積った石材ではないか」と関さんの見立。確認を関さんにお願しました。このつづり折りの擁壁は逆アールの連続で次の段でも逆アール。かなり高度な技術と見受けられました。(若松町3-27)いろいろな話していた住民の方から「何をしているのだ」と審みられました。さらにその擁壁には勾配(3分)がしっかりとついていて崩れを防いでいます。住宅建築のために築かれた擁壁とみられ、笠石があるところ。のちの工事のためブロックに置き換えられているところ、ないところなどがありました。石材は砂質凝灰岩、在島石か房州石かなど考えられます。かつては平坂下まで海だったことで房州から船で運ばれてきたことが有力のようです。平坂の釜屋金物店の防火壁は長買の崖山の石のことです。①②③④⑤
 龍本寺墓地の最上部分には大谷石と思われる右積みの土留め、墓地に沿った敷地境には谷積みの低い石積みが長い公道を形成しています。
 深田から兵衛病院への旧坂は龍本寺の裏坂と呼ばれ、平坂通前はこの坂が坂上と坂下を結ぶ重要な道でした。坂上から下に向かって左の層は右積みで、途中に大正8年ごろに付近の住民などが基金を出し、合い道を整備したことを記す石碑がめ込まれています。少し先に龍本寺参道へ通じる石段があります。石段の踏み石部分は玄武岩と思われる硬い石で1本の大きさは(900×340×220)、下から10段目はブラフ積み、その上に2段の平らな凝灰岩が積まれています。石段を通ると高さ約4m、17段、幅約2.0mのブラフ積みの擁壁となります。反対側には12段で高さ約3.2m、幅1.5mのはっきりしたブラフ積みがあります。⑤⑥⑦⑧⑨
 三浦半島の土留龍本寺参道から本堂へ上がる石段はブラフ積み部分もありますが修復した様子が見られます。⑩
 参道を戻り道なりに右に下ると日本キリスト教会があり、続く擁壁は基部から3段の右積み、その上に7段のブラフ積み、さらに2.5mほどの乱積みと笠石の擁壁があり石積が左へ伸びています。この辺りは乱積みの壁がひな壇状に築かれていて計画的な開発がなされたとも思えます。なお、向かい側のかつて水路があったと思われる14.0mほどの石積みレンガがれきの塊がいくつか散らばっており、そのうちの一つは覆輪目地地の型のようなレンガで、ほかに二重葺き目(金明レンガ)の刻印のあるレンガもありました。震災後などに軍施設の間接レンガを擁壁などに使用することからかなり見受けられますが、今回のコースではこれだけに見られました。⑪⑫
 少し先に戦前の商家の行まいを感じるガラス戸のある家の前を青少年会館の下の道をま

番号	地名	場所	様式	写真	特徴
①	龍本寺	洋風の青山から龍本寺墓地に入る直前のブラフ積み	ブラフ積み		
②	龍本寺	坂上1に続く石積	右積み		この石はブラフ積みと異なる
③	龍本寺	坂上2に続く石積	ブラフ積み+右積み		アールを築く石積
④	龍本寺	坂上3に続く石積	ブラフ積み		「石積は「一」の切込み有り。金谷の跡本家か。」
⑤	龍本寺	兵衛病院への参道奥の坂下に向かい左	右積み		「奥壁は大正8年。瓦葺き有り。」
⑥	龍本寺	龍本寺への参道から坂下	ブラフ積み		かなりしっかりとしたブラフ積み。層間は5cm程度。厚さ4m、幅約2.0m。



紀行文

ブラフ積み擁壁リスト

マップ

図-4.3 紀行文・ブラフ積み擁壁リスト・マップ(①若松町・深田台から抜粋)

等も併せて利用し調査・記録することとした。

④紀行文・ブラフ積み擁壁リスト・マップ作成

現地踏査を終えたのち、紀行文・ブラフ積み擁壁リスト・マップ作成を作成した。

図-4.3 に①若松町・深田台の例を示す。すべての地区については、詳細は巻末資料-Aを参照されたい。

紀行文については、富澤代表が基本的に作成し、富澤代表が現地踏査に参加できなかった場合は、筆者が作成した。また、ブラフ積み擁壁リスト・マップについては筆者が作成した。

⑤個別ブラフ積み擁壁データ作成

現地調査した各擁壁(「ブラフ積み擁壁」を中心)について、表-4.1の調査項目のデータ整理をした。特に、擁壁延長、石材寸法は現地で測れない場合は、擁壁延長については地図から、石材寸法については現地踏査の写真(写真がない場合は google マップのストリートビューから写真)から寸法ではなく比率を判断した。

⑥地区別データ作成

⑤から整理された個別ブラフ積み擁壁データを「地区別データ」にまとめた

表-4.2 に、「①若松町・深田台」を事例に示す。特に表-4.2 においては調査したすべての石垣について

表-4.2 地区別擁壁データ(①若松町・深田台) 石垣様式として「ブラフ積み擁壁」以外はグレー

擁壁番号	町名	石垣様式	ブラフ積み様式	面している場所	坂道階段	切土盛土谷山	垂直傾斜	段数	高さ	延長	石材寸法			石材寸法比率			石材材質	目地の様子	小口面突出度	施工丁寧度	海軍関係or民間	整備時期
											縦	横	長さ	縦	横	長さ						
No.1	若松町	ブラフ	1+1	階段坂道	階段	切山	垂直					###	###	###	房州	?						
No.2	若松町	谷		階段坂道	階段	切山	垂直					0.5	3.5	0.0	1.0	7.0	房州	有り				
No.3	若松町	ブラフ	1+1	階段坂道	階段	切山	垂直	6			1	0.8	2.2	1.3	1.0	2.8	房州	なし	有り	○		
No.4	若松町	ブラフ	1+1	階段坂道	階段	切山	垂直	>10	5	12	260	260	860	1.0	1.0	3.3	房州	?	有り	○		
No.5	深田台	布		道路坂道	坂	山切	垂直	5	35	1	0.8	3.2	1.3	1.0	4.0	黄色・砂岩	なし		○			大正8
No.6	深田台	ブラフ	1+1	道路坂道	坂	山切	垂直	17	4	20	1	1	3.8	1.0	1.0	3.8	房州	なし	有り	○		大正8
No.7	深田台	ブラフ	1+1	道路坂道	坂	山切	垂直	12	3	15	0.8	0.8	3.2	1.0	1.0	4.0	房州	なし	有り	○		大正8
No.8	深田台	谷		道路坂道	坂	山切	傾斜					###	###	###	房州	有り						大正8
No.9	深田台	ブラフ	1+1	道路坂道	坂	山切	傾斜					###	###	###	房州	有り		○				大正8
No.10	深田台	ブラフ	2+1	宅地擁壁	坂	山盛	傾斜	6				###	###	###	房州	有り	なし		△			
No.11	深田台	ブラフ	1+1	宅地・道路	坂	山盛	傾斜	7	2.5	10	1.7	1.7	5.5	1.0	1.0	3.2	房州	なし	?	△		
No.12	深田台	布		宅地	坂	山盛	垂直	3				###	###	###	がれき・れんが	なし						大震災後
No.13	深田台	谷		宅地通路	坂	山切	傾斜					###	###	###	房州	有り			△			
No.14	深田台	ブラフ	1+1	通路・宅地	坂	谷切	傾斜				1	1	3	1.0	1.0	3.0	?	?	有り	◎		
No.15	深田台	ブラフ	1+1	通路・宅地	坂	谷切	垂直	?				###	###	###	房州	有り	有り		◎			
No.16	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	山盛	傾斜					###	###	###	房州	?	?		○			海
No.17	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	山盛	傾斜	20	4	12	1.5	1.4	4.5	1.1	1.0	3.2	房州	?	有り	◎		海
No.18	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	山盛	垂直	3				###	###	###	房州	?	?		△			
No.19	深田台	谷・布		宅地	坂	切山	傾斜					###	###	###	房州	有り			○			
No.20	深田台	谷		宅地	坂	山盛	垂直					###	###	###	房州	有り			△			
No.21	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	切山	垂直	23	4	30?	1.5	2	5.8	0.8	1.0	2.9	?	有り	有り	◎		学校
No.22	深田台	ブラフ	1+1	宅地・道路	坂	切山	傾斜	8				###	###	###	?	?	有り	有り	○			
No.23	深田台	ブラフ	1+1	通路階段	階段	切山	ほぼ垂直	>12			2	1.5	5	1.3	1.0	3.3	房州	なし	有り	◎		

表-4.3 地区別「ブラフ積み擁壁」データ(①若松町・深田台) 項目について見やすくするため種類ごとにグレー

擁壁番号	町名	石垣様式	ブラフ積み様式	面している場所	坂道階段	切土盛土谷山	垂直傾斜	段数	高さ	延長	石材寸法			石材寸法比率			石材材質	目地の様子	小口面突出度	施工丁寧度	海軍関係or民間	整備時期
											縦	横	長さ	縦	横	長さ						
No.1	若松町	ブラフ	1+1	階段坂道	階段	切山	垂直					###	###	###	房州	?						
No.3	若松町	ブラフ	1+1	階段坂道	階段	切山	垂直	6			1	0.8	2.2	1.3	1.0	2.8	房州	なし	有り	○		
No.4	若松町	ブラフ	1+1	階段坂道	階段	切山	垂直	>10	5	12	260	260	860	1.0	1.0	3.3	房州	?	有り	○		
No.6	深田台	ブラフ	1+1	道路坂道	坂	山切	垂直	17	4	20	1	1	3.8	1.0	1.0	3.8	房州	なし	有り	○		大正8
No.7	深田台	ブラフ	1+1	道路坂道	坂	山切	垂直	12	3	15	0.8	0.8	3.2	1.0	1.0	4.0	房州	なし	有り	○		大正8
No.9	深田台	ブラフ	1+1	道路坂道	坂	山切	傾斜					###	###	###	房州	有り			○			#REF!
No.10	深田台	ブラフ	2+1	宅地擁壁	坂	山盛	傾斜	6				###	###	###	房州	有り	なし		△			
No.11	深田台	ブラフ	1+1	宅地・道路	坂	山盛	傾斜	7	2.5	10	1.7	1.7	5.5	1.0	1.0	3.2	房州	なし	?	△		
No.14	深田台	ブラフ	1+1	通路・宅地	坂	谷切	傾斜				1	1	3	1.0	1.0	3.0	?	?	有り	◎		
No.15	深田台	ブラフ	1+1	通路・宅地	坂	谷切	垂直	?				###	###	###	房州	#REF!	有り		◎			
No.16	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	山盛	傾斜					###	###	###	房州	?	?		○			海軍
No.17	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	山盛	傾斜	20	4	12	1.5	1.4	4.5	1.1	1.0	3.2	房州	?	有り	◎		海軍
No.18	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	山盛	垂直	3				###	###	###	房州	?	?		△			
No.21	深田台	ブラフ	1+1	道路・宅地	坂	切山	垂直	23	4	30?	1.5	2	5.8	0.8	1.0	2.9	?	有り	有り	◎		学校
No.22	深田台	ブラフ	1+1	宅地・道路	坂	切山	傾斜	8				###	###	###	?	?	有り	有り	○			
No.23	深田台	ブラフ	1+1	通路階段	階段	切山	ほぼ垂直	>12			2	1.5	5	1.3	1.0	3.3	房州	なし	有り	◎		

示している。最初の作業として、「ブラフ積み擁壁」を抽出するための作業として、「ブラフ積み擁壁」以外を除外するため、セルをグレーにすることで効率を上げた。

表-4.3 に、地区別「ブラフ積み擁壁」データの事例「①若松町・深田台」を示す。この表についてもデータが見やすく整理しやすいように、セルに種類ごとにグレーを施している。

なお、表-4.2、表-4.3 のすべての地区については、詳細は巻末資料-B を参照されたい。

⑦横須賀市内データ集計

⑥の各地区 12 地区のデータを一つの表-4.4 にまとめる。なお、各地区において、個数もしくは割合を出す場合のカウント基準については、表-4.5 のとおりである。なお、擁壁高さ、整備時期については、表-4.4 に項目として入れていない。

表-4.4 のグレー着色については、横須賀市各地区集計したものの平均(小計①)より大きい場合に着色している。

表-4.4 各地区の「ブラフ積み擁壁」集計表

地区番号	地区名	調査数	ブラフ数	1+1以外	宅地目的	坂以外	傾斜擁壁	段数>10	延長>30m	寸法比>4	寸法比<3	大谷石	目地あり	小口突出	施工丁寧	保存度良	軍公共
No.1	若松・深田	23	16	6.3	18.8	25.0	43.8	37.5	6.3	0.0	12.5	0.0	18.8	62.5	31.3	6.3	
No.2	上町	20	17	41.2	52.9	52.9	41.2	29.4	17.6	23.5	5.9	0.0	11.8	35.3	11.8	23.5	
No.3	浦賀道①	23	9	33.3	33.3	44.4	44.4	11.1	11.1	11.1	11.1	0.0	11.1	22.2	33.3	22.2	
No.4	浦賀道②	28	12	8.3	0.0	16.7	58.3	33.3	16.7	0.0	0.0	0.0	58.3	58.3	58.3	41.7	○
No.5	汐入逸見	14	6	33.3	50.0	50.0	33.3	50.0	16.7	16.7	0.0	0.0	83.3	50.0	33.3	16.7	
No.6	汐入坂本	13	6	16.7	66.7	50.0	50.0	33.3	16.7	33.3	0.0	0.0	83.3	83.3	33.3	33.3	
No.8	田戸台	20	19	5.3	26.3	47.4	68.4	36.8	0.0	5.3	0.0	0.0	68.4	78.9	52.6	26.3	○
No.9	佐野	10	9	0.0	33.3	22.2	55.6	33.3	55.6	11.1	0.0	0.0	0.0	66.7	66.7	66.7	○
No.10	豊島小学校	9	7	14.3	57.1	28.6	71.4	57.1	28.6	14.3	0.0	0.0	42.9	57.1	57.1	14.3	
No.11	深田台	9	8	12.5	62.5	25.0	25.0	75.0	0.0	12.5	37.5	0.0	100.0	87.5	87.5	75.0	○
小計①		169	109	16.5	35.8	36.7	50.5	37.6	14.7	11.0	6.4	0.0	43.1	59.6	44.0	30.3	
No.12	観音崎砲台	40	37	21.6	0.0	0.0	5.4	24.3	5.4	0.0	94.6	0.0	70.3	5.4	91.9	67.6	○
No.13	軍	11	11	0.0	0.0	0.0	36.4	45.5	45.5	18.2	45.5	9.1	100.0	45.5	100.0	90.9	○
小計②		51	48	16.7	0.0	0.0	12.5	29.2	14.6	4.2	83.3	2.1	77.1	14.6	93.8	72.9	
合計		220	157	16.6	24.8	25.5	38.9	35.0	14.6	8.9	29.9	0.6	53.5	45.9	59.2	43.3	
No.7	横浜山手	40	40	12.5	40.0	30.0	35.0	45.0	32.5	20.0	7.5	17.5	37.5	5.0	50.0	45.0	
			No.1-No.131.No.7については、「小計①」の平均より高いもの														
	単位		擁壁数:個 それ以外 地区内での割合:%														

表-4.5 集計項目のカウント基準

調査項目	集計項目	カウント基準
石垣様式	ブラフ、布、谷	ブラフ
ブラフ積み様式	1+1,2+1(長手数+小口数)	1+1以外
面している場所	道路、宅地、階段坂道等	宅地目的
坂道・階段	階段、坂	坂以外
垂直・傾斜	垂直、ほぼ垂直、傾斜	傾斜
石垣段数	○○段	10段以上
擁壁高さ	○○m	段数で対応
擁壁延長	○○m	30m以上
石材寸法	○×○×○mm、比○:○:○	寸法比(長手/小口)4以上 3以下
石材材質	房州石、レンガがれき等	大谷石
目地の様子	有り、無し	有り
小口面突出度	有り、無し	突出あり
施工丁寧度	◎、○、△、×	◎
軍・官・民間	海、陸、道路、学校、神社等	軍・公共
整備時期	明治、大正、震災以降等等	同定困難
保存度	◎、○、△、×	◎

5. 他都市の石垣等調査と分析

本研究においては横須賀の「ブラフ積み擁壁」だけでなく他都市の「ブラフ積み擁壁」や海軍鎮守府である呉、佐世保、舞鶴についても調査した。

5. 1. 「ブラフ積み擁壁」調査 横浜、東京

横浜山手等横浜市、三浦半島、東京などについて調査した。

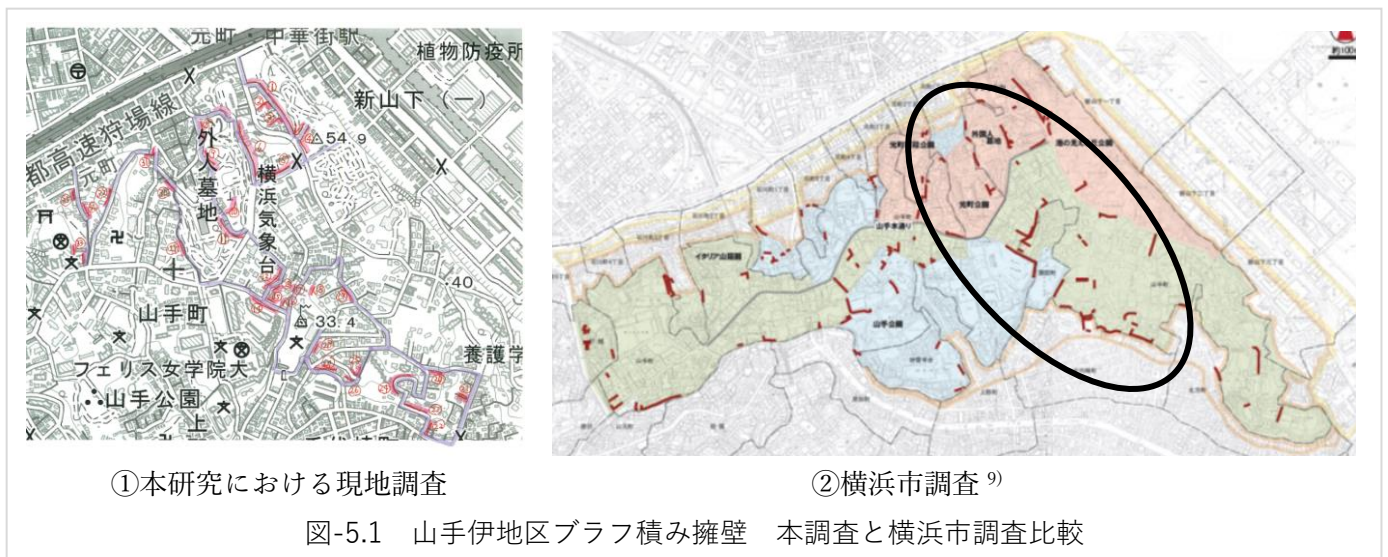
1)横浜山手

横須賀市以外の他都市の「ブラフ積み擁壁」について調べた。WEBを「ブラフ積み」で検索する限り、横浜山手付近しか出てこない。横浜市山手地区の「ブラフ積み擁壁」は、横須賀との比較対象として、4.において現地踏査、マップ作製、集計、分析を行っている。紀行文・ブラフ積み擁壁リスト・マップは、**巻末資料-A**、地区別擁壁データについては、**巻末資料-B**を参照されたい。本研究で踏査した結果の集計表は表-4.4を参照されたい。横浜山手の特徴的な事例2つを写真-5.1に示す。(a)は谷戸坂から1本東側



に入った坂道、海が見える丘公園側の擁壁で、公園には旧フランス総領事公邸があった。延長は170m、段数は10段あり、かなり大規模な擁壁である。(b)は、見尻坂坂上にある気象台周囲の擁壁で、かなり保存状態がよい。逆に一度積み直されているようにも見える。気象台周辺は綺麗に整備され、かつ(c)のように「ブラフ積み擁壁」の案内板もある。

また、①本研究における踏査図と②横浜市作成のブラフ積み擁壁マップ⁹⁾との比較を図-5.1に示す。②



における楕円範囲が①の範囲にあたる。また②のマップについては、横浜市役所の担当者に問い合わせたところ、「市の公用車で山手地区を巡回したときにその分布を調べたものであり、リストやそれ以上の調査はなされていない。」とのことである。

それらからわかることは以下のとおりである。

- ・①本研究の現地調査による「ブラフ積み擁壁」は40か所あり、図-5.1の②横浜市調査のブラフ積み擁壁集中地域をほぼ網羅している。(半日程度これだけの擁壁を調査できたことから高密度地帯と考えられる。)それから類推すると山手地区には、120か所程度あると思われる。
- ・ブラフ積み擁壁は、尾根道よりも、尾根道から平地に降りる谷戸道、谷道、がけ地と平地の境界に多いことがわかる。
- ・横浜山手の「ブラフ積み擁壁」は延長が長く大規模な物が多い。
- ・「小口突出」の割合が少ない。

2)横浜のその他

横浜のその他の地域については、横浜市野毛、大岡川沿い、掘割川沿い、笹下釜利谷街道沿いに見られる。詳細は**巻末資料-C**を参照。

3)三浦半島

横須賀以外の三浦半島では、鎌倉由比ヶ浜の住宅地や逗子田越川付近の住宅地に見られる。詳細は**巻末資料-C**を参照。

4)東京

東京については、「ブラフ積み擁壁」を目的に現地踏査はしていない。一方で筆者は「坂学会」活動を通して東京都内を現地調査している。その中で幾つか「ブラフ積み擁壁」を発見した。市ヶ谷、飯田橋、千鳥ヶ淵、曙橋、赤坂、渋谷で数か所発見した。詳細は**巻末資料-C**を参照されたい。大谷石の擁壁などもあり、横浜横須賀に比較し統一性はあまりない。作られた時代等がばらばらであるからだろう。今後「ブラフ積み擁壁」目的で現地踏査すれば、なお多数の「ブラフ積み擁壁」が見つかる可能性は高い。

5)小樽

小樽市勝納川護岸に面白い「ブラフ積み擁壁」を発見したので特記する。勝納川は、きれいに河川環境整備され、護岸が「ブラフ積み擁壁」のタイプで整備されている。(写真-5.2)理由について国、北海道に問い合わせたところ、「擬石パネル工」であり、石垣ではなかった。イメージとしては、「小樽運河の石倉のイメージ」を踏襲。¹⁸⁾となっている。ただし、小樽港、小樽市内を「海と船が見える坂道」調査にあわせて調べた限りでは、護岸、擁壁、倉庫の石積みは、すべて布積みであり、ブラフ積みは一つも発見できなかった。



写真-5.2 勝納川擬岩護岸

5. 2. 4 鎮守府都市における石垣

横須賀は、戦前は旧海軍鎮守府があった港である。同様の成り立ちの港湾都市としては、旧海軍鎮守府4港として、呉港、佐世保港、舞鶴港がある。これらの港については、横須賀港と同様、水深と静穏度確保のため、リアス式地形が求められた。その結果として、市街地は背後斜面に発展し、市街地には坂道、つまり「海と船が見える坂道」が発達し、「石垣」も発達した。そこで、横須賀と呉、佐世保、舞鶴を比較す

る。比較表を表-5.1 に示す。また、各港の住宅用石垣の写真写真-5.3 に示す。鎮守府としては、横須賀(1884年)、佐世保・呉(1889年)、舞鶴(1901年)の順に設置された。

① 横須賀港

横須賀のブラフ積み擁壁の詳細は6. において述べるが、写真-5.3①の写真は、柏木田遊郭背後、戦前は海軍工廠幹部向けの住宅と思われる地域のブラフ積み擁壁である。石材は、房州石(凝灰質砂岩)と思われる。

表-5.1 4港の石垣擁壁の積み方と石材

港湾名	石積み形式	石材種類
①横須賀	ブラフ積み	房州石(凝灰質砂岩)
②佐世保	布積み	安山岩・玄武岩
③呉	谷積み	花崗岩
④舞鶴	谷積み	花崗岩

②佐世保港

佐世保も海軍鎮守府が設置されたのち発展した都市である。写真-5.3②は平戸往還沿いの峰坂町の石垣であり、正方形の布積みである。街道は江戸時代であるが、石垣や宅地はきれいに整形され整備されている。(布積みについては図-3.2 参照。) 石材は、火山岩である安山岩(もしくは玄武岩)と思われる。長崎については、安山岩の石垣が多く、佐世保も同様の石材と思われる。

③呉港

呉港も海軍鎮守府が設置された後発展した都市である。海軍工廠としては、横須賀をしのぐ規模となった。写真-5.3③は、呉線近くの大歳神社に登る途中の住宅の石垣である。また、呉については、「両城の200段階」「大正期のひな壇住宅」が有名である。石材は、近畿、瀬戸内地方でよく見られる深成岩である花崗岩であり、積み方として、近畿、瀬戸内地域の石垣によく見られるは谷積みである。

④舞鶴港

舞鶴港については、鎮守府が置かれたのがかなり遅いことと、東舞鶴・中舞鶴などかなりの平地もあったことから、背後の丘陵や山岳地に住宅はあまり見られない。しかし、埋め立てや建築物の造成地などの石垣を見ると花崗岩の谷積みとなっている。



①横須賀港



②佐世保港



③呉港

写真-5.3 横須賀港、佐世保港、呉港の石垣擁壁

海軍鎮守府4港の石垣擁壁については、積み方及び石材についてもかなり違いが見られる。石材については、その地域において入手可能な石材、石積み方法についてはその地域の伝統的な石積み方法・石積み業者の影響を受けていると思われる。

6. 横須賀における「ブラフ積み擁壁」の分析

横須賀における「ブラフ積み擁壁」の調査結果について全体、地区別に分析するとともに地区ごとの比較を行う。また、他都市との比較、年代ごとの分析、土地利用との比較、「海と船が見える坂道」との関係について分析した。

6. 1. 横須賀の都市形成

「ブラフ積み擁壁」の分析に入る前に、今回調査を実施した地区を含む横須賀の都市形成について述べる。横須賀の都市形成については、「横須賀市内近代化遺産総合専門調査報告書」¹³⁾に概括で述べられている。詳細は図-6.1、図-6.2に示し、主要な部分に下線を引いてあるが、まとめると以下の通りである。

- ・日用品購入のための商店街は、谷戸に沿って作られた道路の両側に形成。
- ・住宅は山肌の傾斜地。
- ・明治期の住宅開発は、棚田のあぜ道山道を利用。山の斜面に。緑ヶ丘、上町、田戸台。狭隘な道路。
- ・「工員住宅が山間を埋めた。」

(7) 軍人及び職工等の居住地域の拡大と商店街等の形成

「三浦繁昌記」⁽⁴⁾によれば、明治末ごろの既に、若松町から大滝町にかけての街区に横須賀に繁華街が形成されていたと言われる。この街区には、商店、劇場、寄席などが立ち並び、工廠に勤める職工や陸海軍の兵隊で賑わっていた。

一方、日用品等購入のための商店街は、谷戸に沿って造られた道路の両側に形成された。その最も典型的な例は、平坂から上町にかけて形成された商店街である。起伏に富む横須賀の地勢的な条件は、平面的に広がりを持った商店街を形成せず、各谷戸に沿った道路の両側に奥行きが無い商店が連立するという形式である。このような構造の商店街は、船越、追浜、逸見、衣笠、浦賀、久里浜など周辺部においても形成された。

3. 横須賀市の持つ地勢的条件

前述のように横須賀発展の基礎となった中央地区は良好な入り江と半島、海岸まで迫る山と言う地形的な条件の下に発達した。横須賀発展の基点は、海軍工廠と鎮守府の置かれた楠ヶ浦町及び稲岡町などの沿岸部であった。この海軍施設に隣接した大滝町、若松町などのわずかな平地が行政の中心となり、庁舎が開設され繁華街が開けた。

横須賀の全般的な特徴を一言で述べれば、「海軍基地に適した良好な海岸線と狭隘な後背地」となる。工廠や鎮守府の用地を除けば海岸の平地は狭く、住宅は山肌の傾斜地に造らざるを得なかった。横須賀では、計画的な住宅地の開発が行われたのは、かなり後になってからで、本格的な宅地開発は、湘南電気鉄道の開発以降である。明治期の住宅建設は、棚田のあぜ道や山道を利用し、山の斜面に行われたと考えられる。その典型は緑ヶ丘・汐入・上町・田戸台であり、現在でも極めて狭隘な道路がこの地域の住宅地では使われている。一般に「工員住宅が山間を埋めた」とされるが、横須賀市の住宅地形成は未だ十分に解明されている訳ではない。

内陸部には、さまざまな軍事施設が建設された。このような軍事施設は、要塞地帯のため地図上に明瞭な記述がなされず、また、存在さえ記されていない場合もある。このような、軍事機密による存在の不明瞭さは、より一層、横須賀市の地域形成の分析を困難なものとしている。

図-6.1 「横須賀市内近代化遺産総合専門調査報告書」¹³⁾における都市形成の記述の抜粋

- ・住宅は、主要道に通じる山道を利用して開発。開発より小規模な造成。
- ・自然発生的な住宅地に隣接し、陸海軍用地、小規模宅地開発。きわめて複雑。

・上町、深田台、田戸台、汐入、不入斗。和風建築、洋風建築、官舎建築入り乱れる。

(4) 上町等の住宅地

横須賀の住宅地は前述の如く、当初は谷戸の底に通された主要道に通じる山道などを利用して開発されたものである。実態は、開発と言うよりむしろ、斜面等に小規模な造成が行われ、住宅が建てられていたと考えられる。

概して、横須賀住宅地の形成及び建築形態の状況は、自然発生的に成り立った住宅地に隣接して、陸海軍要地、小規模な宅地開発が行われ、極めて複雑な様相を呈する。また、上町・深田台・田戸台・汐入・不入斗などの現存住宅建築は、一般的な戦前の和風建築だけでなく、洋風建築、官舎建築とさまざまなスタイルの住宅が入り交じる。

図-6.2 「横須賀市内近代化遺産総合専門調査報告書」¹³⁾における上町等の住宅地の記述の抜粋

また双木¹⁷⁾により開発の進展と海軍士官の居住特性について研究され、同様の都市形成を結論としている。特に、上町地区の都市形成、横須賀と及び上町地区の海軍士官・技官の居住分布の調査は注目に値する。中里地区のブラフ積み擁壁についての記述があるがさらに詳しい調査はなされていない。

さらに、都市形成に大きな影響を与えたものがある。昭和20年の終戦は当然のことではあるが、大正12年の関東大震災である。関東大震災により、図-6.3に示すとおり、横須賀の埋立地、谷戸の市街地、上町などが多大な被害を受けている。¹⁹⁾この被害を受けて、海軍においては、市内に散在していた海軍関係の用地を海岸部の楠ヶ浦町と稲岡町に集約しようとし、「稲楠土地交換」が実施された。海軍提供用地一覧を表6-1に示す。¹³⁾これらの用地は今回ブラフ積み擁壁調査地区にほとんど存在した。かなりの土地が住宅用地に転換されたものと思われる。

表-6.1 稲楠交換海軍提供用地一覧¹³⁾

用地名	面積(坪)
公郷建築材料置き場	1,163
中里官舎敷地	655
大津射的場敷地	6,300
深田海軍病院敷地	13,237
深田官舎敷地	845
中里海軍病院分院敷地	4,350
同分院脇中里官舎敷地	690
汐入官舎敷地	511
汐留文庫敷地	1,443
汐留官舎敷地	1,975
合計	31,169

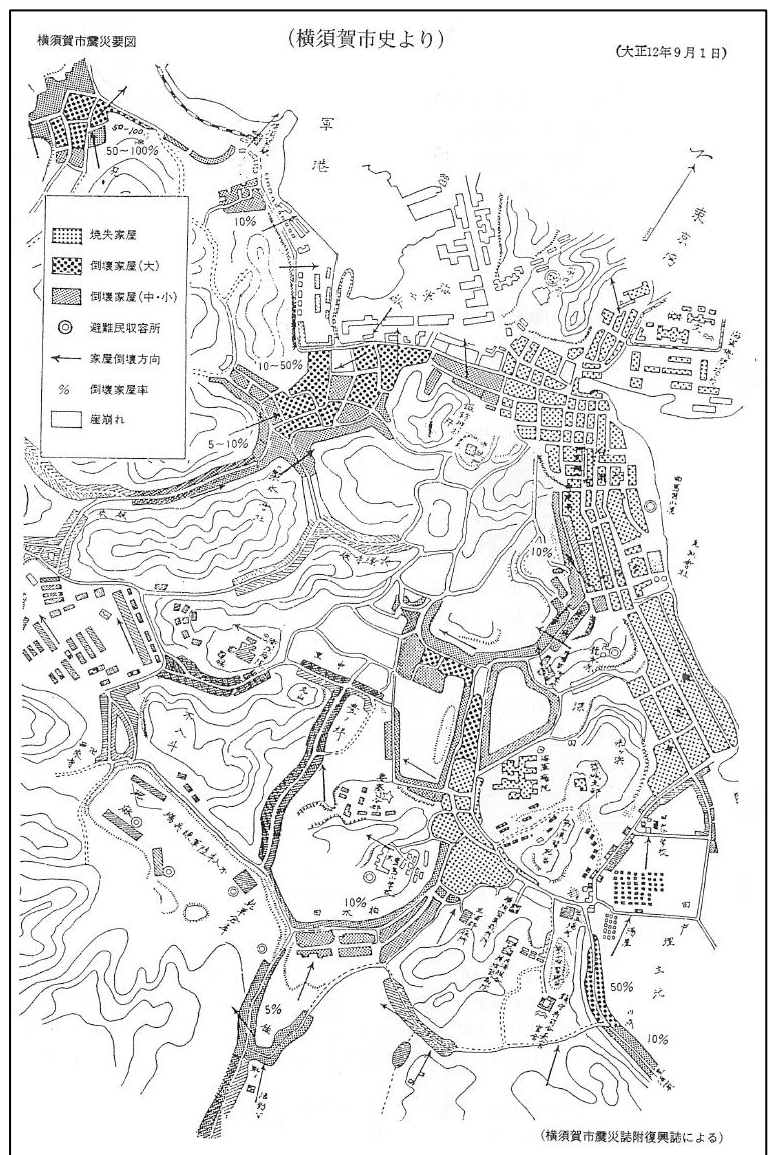


図-6.3 関東大震災による横須賀市の被害図¹⁹⁾

6. 2. 横須賀全体の「ブラフ積み擁壁の」特徴

横須賀全体、及び各地区の「ブラフ積み擁壁」の集計表を表-6.2 に再掲する。

横須賀市内の 10 地区及び旧軍関係の計 12 地区について集計・分析すると以下の通りである。横浜大和や「軍」関係とも比較する。

① 「ブラフ積み擁壁」数

12 地区全体として、220 カ所の石垣擁壁を調査したが、そのうち 7 割の 157 カ所の「ブラフ積み擁壁」が存在した。この数は、5.1.1)で推定した横浜山手の 120 カ所程度に匹敵する。横須賀も横浜山手と同様「ブラフ積み擁壁」の集積地区である。

② 石材配置型

ほとんどが、「長手・小口・長手・小口」の交互積みの「1 + 1」型である。軍関係では「1 + 1」以外は見られない。

③ 擁壁の目的

擁壁の目的は、宅地確保目的は 1/3 程度ありあり、その他は、道路・坂道の盛土・切土擁壁等である。また、坂道・階段以外に面している割合も 1/3 程度であり、両者の割合は同程度あり関係が見られる。

横浜山手は宅地目的がやや多く、軍関係には宅地目的はない。

④ 規模（延長、段数）と傾斜

擁壁の規模として、延長・段数で集計すると、10 段以上が 1/3、30m 以上が 15%を占めている。傾斜については垂直が 1/2 を占めている。

横浜山手、軍も大規模な「ブラフ積み擁壁」の割合が高い。段数は 10 段以上が半数に迫っている。一方で大規模にもかかわらず、垂直擁壁が 2/3 を占めている。

⑤ 寸法比（長手と小口）

横須賀の場合、寸法比がほとんど 3～4 に入っている。

一方軍の場合は、3 以下が多く、逆に横浜山手は 4 以上の割合も高い。

表-6.2 各地区の「ブラフ積み擁壁」集計表

地区番号	地区名	調査数	ブラフ数	1+1以外	宅地目的	坂以外	傾斜擁壁	段数>10	延長>30m	寸法比>4	寸法比<3	大谷石	目地あり	小口突出	施工丁寧	保存度良	軍公共
No.1	若松・深田	23	16	6.3	18.8	25.0	43.8	37.5	6.3	0.0	12.5	0.0	18.8	62.5	31.3	6.3	
No.2	上町	20	17	41.2	52.9	52.9	41.2	29.4	17.6	23.5	5.9	0.0	11.8	35.3	11.8	23.5	
No.3	浦賀道①	23	9	33.3	33.3	44.4	44.4	11.1	11.1	11.1	11.1	0.0	11.1	22.2	33.3	22.2	
No.4	浦賀道②	28	12	8.3	0.0	16.7	58.3	33.3	16.7	0.0	0.0	0.0	58.3	58.3	58.3	41.7	○
No.5	汐入逸見	14	6	33.3	50.0	50.0	33.3	50.0	16.7	16.7	0.0	0.0	83.3	50.0	33.3	16.7	
No.6	汐入坂本	13	6	16.7	66.7	50.0	50.0	33.3	16.7	33.3	0.0	0.0	83.3	83.3	33.3	33.3	
No.8	田戸台	20	19	5.3	26.3	47.4	68.4	36.8	0.0	5.3	0.0	0.0	68.4	78.9	52.6	26.3	○
No.9	佐野	10	9	0.0	33.3	22.2	55.6	33.3	55.6	11.1	0.0	0.0	0.0	66.7	66.7	66.7	○
No.10	豊島小学校	9	7	14.3	57.1	28.6	71.4	57.1	28.6	14.3	0.0	0.0	42.9	57.1	57.1	14.3	
No.11	深田台	9	8	12.5	62.5	25.0	25.0	75.0	0.0	12.5	37.5	0.0	100.0	87.5	87.5	75.0	○
小計①		169	109	16.5	35.8	36.7	50.5	37.6	14.7	11.0	6.4	0.0	43.1	59.6	44.0	30.3	
No.12	観音崎砲台	40	37	21.6	0.0	0.0	5.4	24.3	5.4	0.0	94.6	0.0	70.3	5.4	91.9	67.6	○
No.13	軍	11	11	0.0	0.0	0.0	36.4	45.5	45.5	18.2	45.5	9.1	100.0	45.5	100.0	90.9	○
小計②		51	48	16.7	0.0	0.0	12.5	29.2	14.6	4.2	83.3	2.1	77.1	14.6	93.8	72.9	
合計		220	157	16.6	24.8	25.5	38.9	35.0	14.6	8.9	29.9	0.6	53.5	45.9	59.2	43.3	
No.7	横浜山手	40	40	12.5	40.0	30.0	35.0	45.0	32.5	20.0	7.5	17.5	37.5	5.0	50.0	45.0	

No.1-No.131.No.7については、「小計①」の平均より高いもの

単位 擁壁数:個 それ以外 地区内での割合:%

⑥石材

横須賀はすべてが凝灰質砂岩礫岩(房州石等)だが、横浜山手では、大谷石がかなり見られる。

⑦施工(目地、丁寧度合)

横須賀、横浜山手は半数近くに目地にモルタルが塗られ、丁寧に施工されている。軍の場合は、すべてに目地にモルタル、施工が丁寧である。

⑧小口の突出

横須賀、軍は1/2程度突出しているが、横浜山手には突出型はほとんど存在しない。

⑨保存度合い

横須賀が3割程度に対し、横浜山手は1/2、軍は9割が保存状態がよい。

6. 3. 各地区における「ブラフ積み擁壁」の分析

図-4.2 に示す 13 地区(横浜山手を含む)について各地区の擁壁及び「ブラフ積み擁壁」の特徴を分析する。分析項目として、地区の概要、歴史的背景、擁壁の特徴、ブラフ積み擁壁の特徴、おすすめの「ブラフ積み擁壁」、その他の6項目である。各地区の詳細は、**巻末資料-A** 横須賀各地区「紀行文・ブラフ積み擁壁リスト・マップ」、**巻末資料-B** 横須賀地区別擁壁・「ブラフ積み擁壁」データ、表-6.1「各地区の「ブラフ積み擁壁」集計表」を参照されたい。

①若松町・深田地区(図-6.4)

(地区の概要)

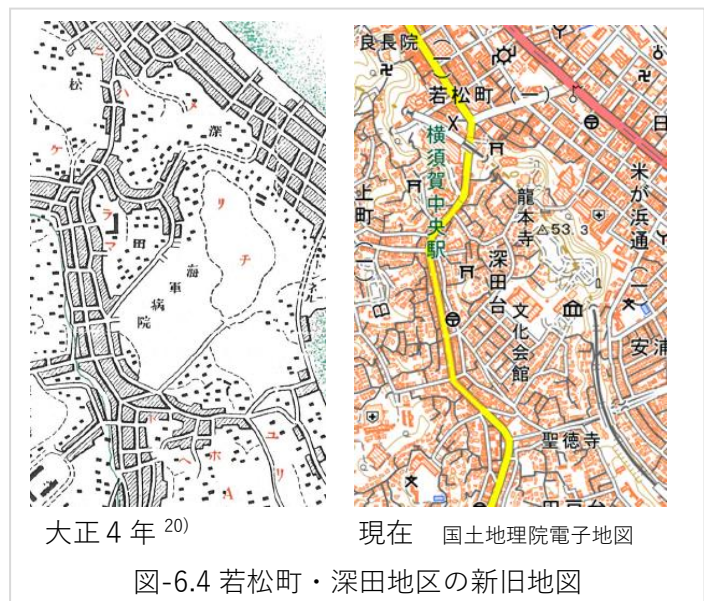
当該地区は、平坂と龍本寺、浦賀道、文化会館に囲まれた地域である。横須賀中央駅から平坂の坂下、高層マンションの駐車場のある崖部を上る階段坂道がありその坂上には墓地と住宅地がある。また、平坂の商店街から龍本寺に向かう道路、さらには、浦賀道から文化会館を通り龍本寺に向かう道路があり、これら道路の周辺住宅地である。さらに大正8年頃には、横須賀共済病院から龍本寺に向かう「裏坂」も作られている。全般に住宅等民間施設が多い。

龍本寺にのぼる文化会館及び周辺は、関東大震災以前は海軍病院や重歩兵旅団司令部・横須賀築城部支部があった。関東大震災後は稲楠土地交換と区画整理が行われ市立病院と住宅地になった。

当該地区は、平坂や横須賀中央駅に近いことから住宅が多数立地している。また昭和5年までは横須賀港当女学校も立地していた。

(歴史的背景)

歴史的には、横須賀製鉄所が建設され、明治5年には、造船所(明治4年(1871)に製鉄所から造船所に改称)は海軍に移管され、明治10年には海軍港に指定される。さらに明治17年には海軍鎮守府が横須賀に移転した。この時期、人口増に伴い、市街地は大滝町から平坂沿い及び汐入町に延びる。平坂は明治10年に開通しこれまでの浦賀道は旧道となり平坂が浦賀道に変わる。併せて海軍病院等が深田に設定さ



れる。

なお、横須賀のこの時期の住宅地は、谷戸の底に通された主要道に通じる山道などを利用して開発され、開発というよりは斜面等の小規模な造成が行われ住宅が建てられた。また、和風建築だけでなく洋風建築、官舎建築など様々なスタイルの住宅が入り交じった。¹³⁾

そのなかで、坂道や擁壁が発達したと考えられる。

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては、全体で23カ所あった。そのうちブラフ積み擁壁は16カ所である。谷積み、布積みの擁壁も多い。また、関東大震災で発生したレンガがれきを谷積みにした擁壁も見られた。(写真-6.1)(No.12)

擁壁としては、平坂下から龍本寺墓地に上る階段沿い、共済病院から龍本寺に至る「裏坂」沿い、浦賀道から文化会館に至る坂道沿い、神明神社を頂上とする丘陵周辺の住宅地内路地の擁壁等がある。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は16カ所ある。全体として、ほとんどが道路確保のための擁壁であり、延長は長くない。長短の寸法比は、ほとんどが3~4に収まり標準的である。目地のモルタルは少なく、逆に小口の突出度合いが高い。施工の丁寧度は高くなく、保存状態は余りよくない。以上の特徴は民間施設が多いためと思われる。

平坂下から龍本寺墓地に上る階段沿いには3カ所あり、坂道自体が曲線を描いていることから、擁壁も曲線を描き景観的にはよい。共済病院から龍本寺に至る「裏坂」沿いには3カ所。かなり大規模なブラフ積み擁壁であるが保存状態が一部悪い。浦賀道から文化会館に至る坂道沿いには、3カ所あり、上って右側の住宅用擁壁については、関東大震災後の区画整理で整備されたと思われる。立派で大規模であり、戦前の海軍用と思われる住宅もあったが一部は最近解体されている。神明神社を頂上とする丘陵周辺の住宅地内路地の擁壁にも幾つかあるが、住宅等のために非常に見にくくなっている。高等女学校に上る道路の擁壁についても立派であるが住宅のため見にくくなっている。さらに、日本キリスト教教会付近のブラフ積みも住宅用としては立派である。

(おすすめの「ブラフ積み擁壁」)(写真-6.2) No.○は、巻末資料A 地区番号1 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として4カ所。

平坂下から龍本寺墓地に上る階段沿いには、3カ所あり、おすすめは、No.4。坂道自体が曲線を描いていることから、擁壁も曲線を描き景観的にはよい。

共済病院から龍本寺に至る「裏坂」沿いには3カ所。おすすめは、No.6。かなり大規模なブラフ積み擁



写真-6.1 No.12
レンガがれき布積み



No.4 裏坂



No.6 裏坂



No.11



No.17

写真-6.2 若松町・深田地区 おすすめ「ブラフ積み擁壁」

壁であるが保存状態が一部悪い。

浦賀道から文化会館に至る坂道沿いには、3カ所あり、上って右側の住宅用擁壁については、関東大震災後の区画整理で整備されたと思われる。おすすめは No.17。立派で大規模である。

日本キリスト教教会付近のブラフ積み No.11 も住宅用としては立派であり、おすすめ。

②上町地区(図-6.5)

(地区の概要)

当該地区は、平坂の西方、中里神社周辺地区と、緒明山(現在の中央図書館)を頂上とする旧中里(現在の上町)地区である。

中里神社周辺は住宅地として開発されている。また、緒明山周辺については、大正4年の地図でも住宅が立地しているとともに、昭和11年には緒明山配水池が作られ現在は読書山公園となっている。そして、中央図書館も立地している。

さらに、昭和11年には中里トンネル(信号機のある珍しいトンネル)も開通している。中里トンネル北側についても大正4年の地図でもすでに道路があり、住宅が立地していることがわかる。

(歴史的背景)

当該地域は、平坂と汐入の間の丘陵地や谷戸の頂上付近であることから、製鉄所、造船所、海軍交渉関係の人口増を吸収するために開発されたところと思われる。すでに大正4年の地図において、住宅が立地し、主な道路の骨格が形成されている。また、東京湾要塞司令部と重砲兵連隊との中間に位置し、そのための連絡道路が整備されている。さらに、住宅等の増加と谷戸の連絡強化のために昭和11年に中里トンネルが整備されている。そのなかで、坂道や擁壁が発達したと考えられる。

(擁壁の特徴)

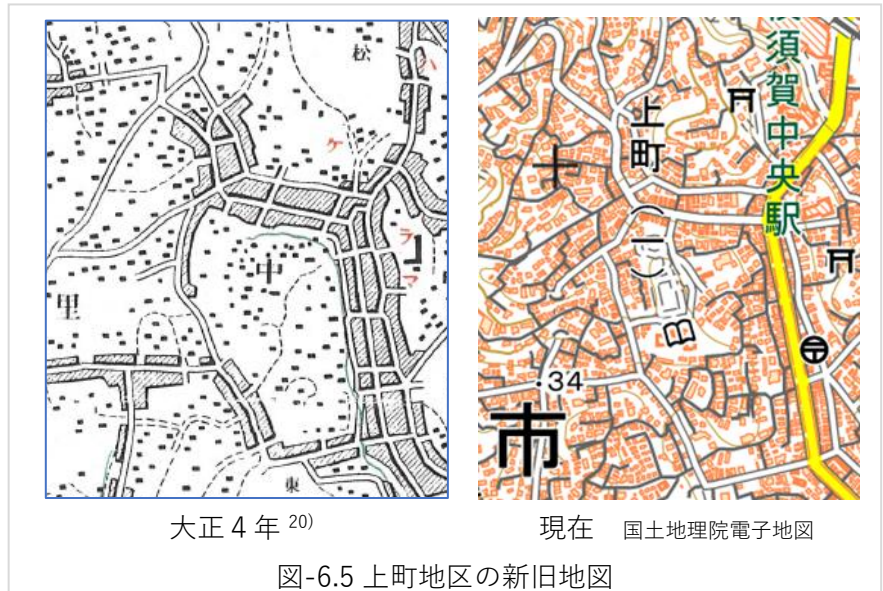
調査した擁壁としては、全体で20カ所あった。そのうちブラフ積み擁壁は17カ所である。ブラフ積み擁壁が多い。

擁壁としては、中里神社周辺の歩道道路の擁壁、緒明山周辺の住宅と路地確保のための擁壁、旧中里地区(現上町地区)の道路に面した宅地確保のための擁壁、中里トンネルに関係する擁壁が多い。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は17カ所ある。全体として、住宅地確保のためのブラフ積み擁壁が多く、半数以上の9カ所を占める。特徴的なのは、長手と小口の配列が「1+1」型でなく、「2+1」「3+1」が半数近くの7カ所あることである。延長が30mを超えるものが3カ所あり多い方である。長短の寸法比は、4以上が、1/4の4カ所あり意外と多い。目地のモルタルは少なく、逆に小口の突出度合いも低い。施工の丁寧度は低く、保存状態は余りよくない。

以上のことから、この地区のブラフ積み擁壁は、民間による民間のため構造物と思われる。



大正4年²⁰⁾

現在 国土地理院電子地図

図-6.5 上町地区の新旧地図

（おすすめの「ブラフ積み擁壁」）（写真-6.3） No.○は、巻末資料 A 地区番号 2 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として3カ所。

緒明山周辺にある宅地及び路地確保のための擁壁。No.5。かなりきれいなブラフ積み擁壁である。

中里トンネルから尾根部に上がる途中にある住宅用のブラフ積み擁壁。No.12。特徴は、段数が確認しただけでも26段あり、また、擁壁の傾斜はやや緩く石垣風になっていることである。横須賀市内では珍しい。

中里トンネル北側のかなり古い住宅との住宅と確保のための擁壁。No.16。特徴はその維持管理が行き届いていることである。目地にはモルタルはないが、雑草一つなく、手入れが行き届いていることがうかがわれる。このあたりも海軍関係の住宅地と思われる。



写真-6.3 上町地区 おすすめ「ブラフ積み擁壁」

③浦賀道①（図-6.6）

（地区の概要）

当該地区は、横須賀の浦賀道の中で、現在でも「海と船が見える坂道」ウォーキングのメインの一つである。逸見駅から東逸見町へ向かい、稲荷坂から浦賀道の山越えルートとなり、汐入1丁目を通り、汐入2丁目もしくは、汐入5丁目に下り汐入駅に至るルートである。

大正4年の地図には浦賀道が明確に描かれ、



図-6.6 浦賀道①地区の新旧地図

途中港町に降りる道（現在の一国坂）も描かれている。汐入に降りる道は、途中点線道と2つに分かれるが、現在一般的に浦賀道と呼ばれているものは点線道であり汐入2丁目を通り、幹線道は汐入5丁目に降りる。

この浦賀道ルートは、港や海がよく見え「海と船が見える坂道」となっている。また、途中、ヴェルニー公園に降りる「一国坂」があり、私のおすすめ一番の「海と船が見える坂道」となっている。（写真-6.4）

さらに、このルート沿いは丘陵地であるものの住宅が多数立地し、近年は空き家も増えている。

（歴史的背景）



写真-6.4 一国坂

浦賀道は、江戸時代、東海道保土ヶ谷と六浦湊・金沢を經由し、浦賀湊・浦賀奉行所とを結んだ街道である。特に、追浜から安浦に至る地区は、リアス式地形、谷戸の発達から山岳ルートとなっている。浦賀道については、山岳ルートであることから、金沢(野島湊)と榎戸(深浦)、汐留(汐入)を結ぶ海上ルートもあったという。¹³⁾ 浦賀道は、明治20年国道45号に指定され、明治21年には、榎戸(逸見)の海上航路開設、明治22年横須賀線開通で、造船所、海軍工廠と併せて浦賀道の重要性は増した。一方で、昭和3年に、国道45号改め国道31号が、トンネルを基本として開通した。逸見-汐入区間については、大正4年の地図でもすでに道路が海岸沿いに見られる。このため大正時代には浦賀道の役割は終えたと思われる。

大正4年の地図でも浦賀道沿いには多数の住宅が見える。海軍工廠に合わせて住宅が立地したと思われる。逸見及び汐入の谷戸については明治時代に住宅開発が進んだと思われる。その中で、「ブラフ積み擁壁」が進んだと思われる。

また、汐入2丁目付近については関東大震災で大規模がけ崩壊が発生している。

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては、全体で23カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は9カ所である。決してブラフ積み擁壁は多くない。一方で、谷積みの擁壁が多数ある。それも浦賀道沿いに多く存在する。この傾向は、後ほど紹介する④浦賀道②(ブラフ積み擁壁の割合が高い)と全く逆である。

擁壁としては、浦賀道沿いに多い。特筆すべきは、汐入駅近く汐入2丁目の浦賀道において多数のレンガがれきの谷積み擁壁(No.20)が多数あることである。(写真-6.5)この地区では関東大震災時、大規模崖崩壊が起きているのに関係があると思われる。このレンガがれき擁壁については、近年順次モルタルで塗られてその姿が見えなくなりつつある。補強目的のないモルタル塗りであれば、通行者でも見られるように現在のまま保全すべきと考える。



写真-6.5 No.20
レンガがれき谷積

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は9カ所ある。全体として、宅地目的のものは1/3程度で、道路の擁壁が多い。また、坂道に接する擁壁は半分程度。大規模な擁壁は1カ所しかない。目地にモルタルのあるものや小口が突出しているものは少ない。また施工もそれほど丁寧でなく、保存状態もそれほどよくない。住宅地確保のためのブラフ積み擁壁が多く、半数以上の9カ所を占める。また、長手と小口の配列が「1+1」型でなく、「2+1」「3+1」が1/3と割合多い。

以上のことから、この地区のブラフ積み擁壁は、民間による民間のため構造物と思われる。

(おすすめの「ブラフ積み擁壁」)(写真-6.6) No.○は、巻末資料A 地区番号3 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として1カ所。

浦賀道が逸見～山岳コースに入る稲荷坂沿いの擁壁 No.4。かなりきれいで延長が長く60mある。結構コケ類が生えているが、施工も丁寧で保存状態もよい。浦賀道まち歩きと併せて「海と船が見える坂道」である稲荷坂とブラフ積みとセットで地域資源になりそうである。



写真-6.6 おすすめ「ブラフ積み擁壁」No.4 稲荷山の坂

④浦賀道② (図-6.7)

(地区の概要)

当該地区も、横須賀の浦賀道ウォーキングのメインの一つになるルートである。汐入駅から横須賀中央に向かう谷町の坂、小屋の坂、大勝利山、うぐいす坂から平坂に至る。浦賀道①と同様山越えルートとなる。汐入2丁目から、緑が丘、汐入3丁目を通り上町1丁目に至るルートである。

この浦賀道ルートは、坂道が多く一部階段となっているが、自動車も通られる部分もあり、浦賀道としては道幅も広い部分もある。今地区は、浦賀道以外には、中里神社北部の崖近くや、汐入と上町を結ぶ長源寺坂の部分も含まれる。

このルート沿いは丘陵地であるものの、住宅が多数立地し、横須賀中央駅に近いことから空き家は少なく感じる。

(歴史的背景)

当地区の浦賀道は、幕末からの造船所に伴う大滝町など下町の開発、明治10年の平坂開通などにより、汐入から海岸線や埋立地を通り平坂を登り上町に向かう道であることが、明治18年の絵図(図-6.8)からわかる。従前の浦賀道は旧浦賀道となっている。旧浦賀道沿いには「ブラフ積み擁壁」が多数ある。旧浦賀道と浦賀道の交点に大正時代に立てられた「道路元標」がある。

また、汐入と上町を結ぶ長源寺坂については、新旧の坂があり、関東大震災後「新長源寺坂」となりブラフ積み擁壁を擁する車道となっている。

さらに、関東大震災の後と思われるが、上町1丁目の中に1カ所レンガがれきの谷積み擁壁がある。(写真-6.7)No.21。

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては、全体で28カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は12カ所である。決してブラフ積み擁壁の割合は高くない。一方で、谷積みの擁壁が11カ所と多数ある。ブラフ積み擁壁は浦賀道沿いに多く存在する。先ほど紹介した④浦賀道①とは全く逆である。

特に、汐入小学校付近の擁壁、大勝利山付近からうぐいす坂に至る浦賀道についてはほとんどがブラフ積み擁壁となっている。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は12カ所ある。この地区の特徴として、宅地だけの目的のものは全くないことである。住宅と関係しても浦賀道や長源寺坂等道路と関係(道路が主目的)したブラフ積み擁壁となっていることである。また、坂道に接する擁壁がほとんどで8割強である。大規模なものとして20段を超えるものが3カ所、延長30mを超えるものが2カ所、25mが3カ所あり大規模なものが多い。目地にモルタルのあ



図-6.7 浦賀道②地区の新旧地図



図-6.8 横須賀明細一覽図²¹⁾



写真-6.7 No.21
レンガがれき谷積

るものや小口が突出しているものも6割近く。施工が丁寧なものも6割近く、保存状態のよいものが4割ある。また、石材の大きさ、積み方も平均的で割合が突出したものはない。

以上のことから、この地区のブラフ積み擁壁は、浦賀道、長源寺坂という道路と関係していることがうかがわれ、公共が関与した構造物と思われる。施工・保存状態、施工規模から見て「保存すべきブラフ積み擁壁地区」である。

（おすすめの「ブラフ積み擁壁」）（写真-6.8） No.○は、巻末資料A 地区番号4 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として3カ所。浦賀道沿いが2カ所、長源寺坂沿いが1カ所である。

汐入駅から浦賀道の入り口にある汐入小学校の擁壁 No.1。昭和3年の汐入小学校の改修に合わせて絵はがきがあり、ブラフ積み擁壁の施工写真である。30mを超え、17段の施工、保存も立派な擁壁である。

さらに浦賀道を進み聖ヨゼフ病院の三叉路に突き当たり、右折し浦賀道を上ると左側斜面にブラフ積み擁壁 No.12。一部足場が置かれているが、劣化が少なく保存状態はよい。ここから浦賀道のブラフ積み擁壁地区が始まる。

この付近の浦賀道からは冬の晴れた夕方富士山も望むことが可能で、ブラフ積みとセットで、地域資源にできそうである。

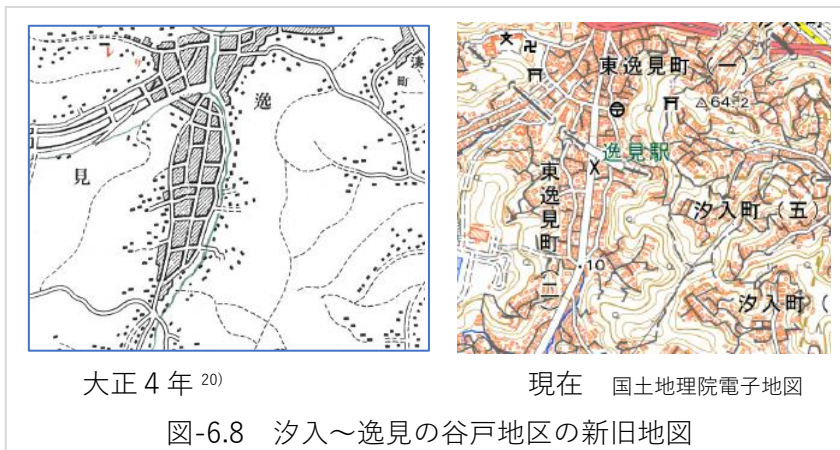
汐入から上町に行く方法として長源寺坂を通る方法があり、関東大震災後造られた新道のブラフ積み擁壁 No.18。20段で延長20mである。ほぼ垂直の擁壁で威圧感がすごい。関東大震災復興誌に写真がある。ブラフ積みとしては後期のものであり、技術的にも洗練されていると思われる。自動車で走っても確認できる。



⑤ 汐入～逸見の谷戸（図-6.8）

（地区の概要）

当該地区は、浦賀道から稲荷坂を登り一国坂に向かう十字路を右に曲がり東逸見と汐入の尾根道を進み、一部汐入の谷戸に降りて再度尾根道に戻り、京急逸見駅に降りる。その後逸見浄水場の丘陵の東側・東逸見町から北側・西逸見町にかけての斜面を踏査し降りるルートである。大正4年の時点



では住宅等はないが、最近の地図では、汐入側の谷戸、浄水場東側北側に住宅が立地している。

浄水場北側斜面の階段・坂道からは横須賀港がよく見え、「海と船が見える坂道」となっている。

なお当該ルートについては、谷戸や急で細い坂道、階段が多く空き家も多く見られる。

(歴史的背景)

この区間は浦賀道など主要道から外れているものの、造船所、海軍工廠などの立地や明治22年の横須賀線開通などにより、明治時代に逸見の市街化が進み、丘陵部の道路網もこの頃できあがったといわれている。また陸軍により作られた道以外は、農道・林道と余り変わりなく無計画な宅地化が進んだと思われる。さらには、昭和5年の湘南電気鉄道の開通により宅地化が進んでいる。¹³⁾

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては、全体で14カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は6カ所である。ブラフ積み擁壁の割合は半分以下。一方で、谷積みの擁壁が8カ所と多数ある。ブラフ積み擁壁は斜面沿いの小道沿いに多く存在する。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は6カ所ある。この地区の特徴として、住宅地確保のための擁壁が半数である。斜面沿いの階段坂道の小道沿いの住宅地確保のためのものが2カ所あり、住宅地関係が多い。また、石材の配置が「1+1」以外が1/3もある。延長、段数が大規模のものも平均的であり、小口突出も平均的である。目地にモルタルのあるものが多いが、施工丁寧度は普通であり、保存状態も普通である。谷戸であるため格差やコケで覆われているところが多い。

以上のことから、この地区のブラフ積み擁壁は、公共として作られたというよりも、海軍工廠などの職工のため、斜面の農道等を利用した斜面の宅地開発に伴う民間によるブラフ積み擁壁と思われる。

(おすすめの「ブラフ積み擁壁」)(写真-6.9) No.○は、巻末資料A 地区番号5の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として1カ所。浄水場東側谷戸のブラフ積み擁壁。No.8。坂道の小道に接している住宅地確保のためのブラフ積みである。段数は10段でやや規模の大きい擁壁である。段数が高いため、傾斜があり、石垣風に少し反っている。

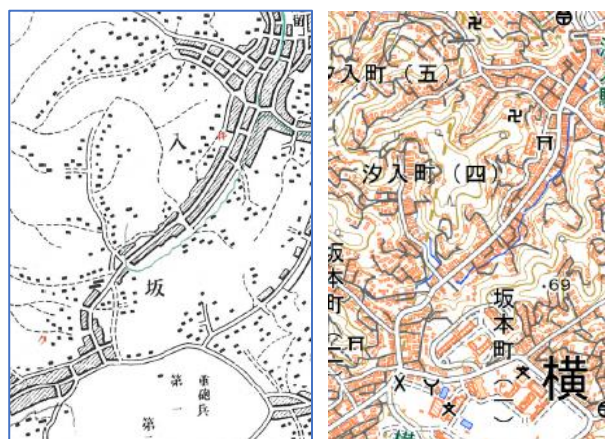


写真-6.9 No.8

⑥ 汐入～坂本の谷戸 (図-6.9)

(地区の概要)

当該地区は、汐入4丁目から坂本2丁目に至る坂本の坂を通るルートである。裏道は八坂道と呼ばれる。大正4年の地図でも両側には商店街が形成されている。途中子之神社がある。もとは米軍内、泊にあったが、明治17年子之神山に移転、明治32年に現在地に移転している。このルートの両側の谷に向かって幾つか集落が形成されている。このルートについては、途中から勾配が急に



大正4年²⁰⁾

現在 国土地理院電子地図

図-6.9 汐入～坂本の谷戸地区の新旧地図

なり、最後坂本の坂を登り切ると坂本の町となる。坂本からは、逸見に抜ける水道トンネルもある。

大正4年と現在の写真を比べても早期に住宅地として開発されていることがわかる。

(歴史的背景)

この区間は汐入から、坂本、池上、さらには葉山に続く八坂道に当たる。造船所、海軍工廠ができてから、さらに商店街・住宅地として発達している。坂本においては、明治24年に陸軍の要塞砲兵連隊本部が置かれている。そのため、坂本の坂については、当初は汐入の田んぼのためのため池であったものを明治38年に埋立てられ現在の坂本の坂が作られた。²⁰⁾

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては、全体で13カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は6カ所である。ブラフ積み擁壁の割合は半分以下。一方で、谷積みの擁壁が6カ所と多数ある。このルートにもレンガがれきによる谷積み擁壁がある。坂本の坂を登り切り、右側の高台にある「大六天神社」への参道の切り通しである。(写真-6.10)No.10。



(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は、6カ所ある。この地区の特徴として、住宅地確保のための擁壁が2/3。石材の寸法比4以上が2カ所あること、目地にモルタルがあり、小口が突出しているものが5カ所と多いことが特徴である。その他は、平均的である。ただし、No.6の坂本の坂のブラフ積み擁壁は、子之地区の擁壁としては例外である。

以上のことから、この地区のブラフ積み擁壁は、公共として作られたというよりも、海軍工廠などの職工や商店のため民間によるブラフ積み擁壁と思われる。

(おすすめの「ブラフ積み擁壁」)(写真-6.11) No.○は、巻末資料A 地区番号6 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として2カ所。坂本の坂道のブラフ積み擁壁No.6と子之神社の擁壁No.1。No.6については、八坂道の新道であり、坂本に明治24年にできた陸軍の要塞砲兵連隊本部や住宅地下に伴い明治38年に作られたと思われる。延長85m15段の大規模な擁壁であり、横須賀市内においても規模が大きい方である。目地にはモルタルがあり小口は突出しいないが、施工は丁寧で保存状態もよい。公共による整備と思われる。途中のブラフ積み擁壁内の馬頭観音には「昭和5年」とある。また、坂本の坂上のブラフ積み終端部は、路地になっていてブラフ積みが丁寧に施工されている。

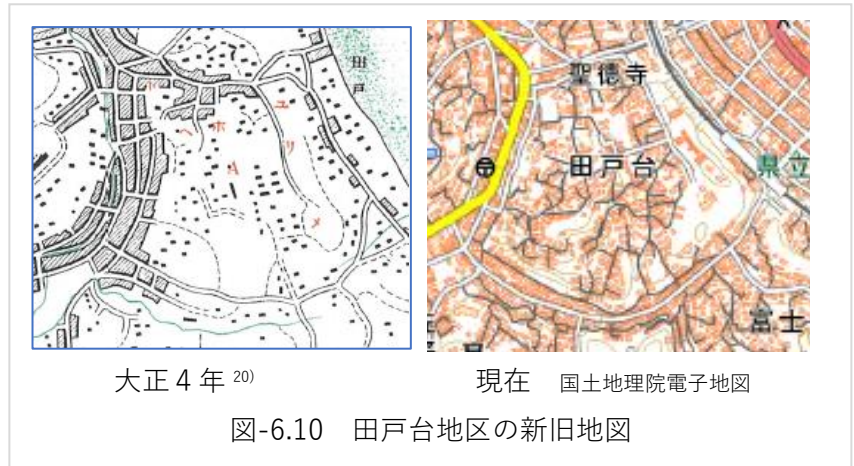
子之神社の擁壁No.1については、駐車場側の擁壁である。道路側の擁壁については布積み安山岩と思われる。明治31年移転当時に作られたと思われるが、正面の大事な部分は安山岩岩を使うなど、利用目的と費用の関係を考慮していると思われる。



⑧田戸台 (図-6.10)

(地区の概要)

当該地区は、田戸台と呼ばれている地域である。住所は田戸台であり、丁目はなく、すぐ地番となる。一部富士見町もある。上町から海岸線に降りる聖徳寺坂、浦賀道旧税務署付近から南に至る三崎街道、南側を三崎街道から県立大学駅に至る道路に囲まれたエリアである。東側は海食



崖となり、京急線が走っている。地形的には、北から南に向かって谷戸が発達している。エリア南西部が一番標高が高い。田戸台という地名は昭和25年からであり、ほとんどは従前、公郷と呼ばれていた。この地域も、上町、汐入、深田台などと同様に、陸海軍用地や小規模開発が行われて、山道などを利用して開発が行われてきている。¹³⁾

大正4年の地図でも一部宅地は建物が見られる。戦後は谷戸に住宅開発がさらに進んだ。

(歴史的背景)

この地区は周囲を崖や道路に囲まれた谷戸地域であり、明治10年の平坂開通以来、軍関係の施設や公共機関が立地している。明治15年に横須賀海軍刑務所、17年に同地に鎮守府軍法会議、明治45年に横須賀鎮守府司令長官官舎が立地している。また、演習砲台、明治31年に横須賀裁判所、さらに明治36年に三浦郡役所、明治41年に横須賀職工共済病院が立地している。(大正15年に現在地に移転)併せて職工長屋も作られたという。このように戦前においては割合公的機関や関係の住宅が多数立地している。¹⁶⁾

戦後は、裁判所なども残っていたが、他地域に移転するなど現在においては海上自衛隊幹部宿舎等が残っているのみである。

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては全体で20カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は19カ所である。ブラフ積み擁壁の割合は非常に多い。逆に効率性を確保するためブラフ積み擁壁を中心に調べたためとも思われる。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は19カ所ある。この地区の特徴として、住宅地確保のための擁壁が1/4と少ない。道路沿いの宅地確保も兼ねた擁壁が多い。大規模のブラフ積み擁壁は少ないが、擁壁としては平均的な規模である。傾斜のある擁壁は割合多い。平均的な積み方、石材である。目地にモルタルがあり、小口が突出しているものが7割と8割と多いことが特徴である。また、施工状態は丁寧であるが、保存状態はよくない。

以上のことから、この地区のブラフ積み擁壁は、軍関係や公共的な機関も多いことから丁寧な施工であるが大規模なものは見られない。

(おすすめの「ブラフ積み擁壁」) (写真-6.12) No.○は、巻末資料A 地区番号8 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として2カ所。田戸台11区のブラフ積み擁壁。No.7と田戸台4区の擁壁No.14。

No.7 は丘陵地の頂上付近にある。田戸台では一番高いブラフ積み擁壁。関東大震災後、第三海堡の石工が積み、海軍高官が住んでいたといわれる。¹⁶⁾ 周辺には元共済病院の看護婦宿舎、病院があった。かなりきれいである。

No.14 は黒田牧場跡地から田戸台に上る坂道の両側の擁壁である。擁壁の上に海軍上級クラスの住人が暮らしたという一帯。この高台の向こう側 No.15 についてもブラフ積み擁壁となっている。

これらの擁壁は海軍関係者の住宅確保という面もあり、施工が丁寧である



No.7

No.14

写真-6.12 おすすめ「ブラフ積み擁壁」

⑨佐野町 (図-6.12)

(地区の概要)

当該地区は、田戸台地区の南側の丘陵地帯で佐野町1丁目である。この地区は決して広い地区ではないが、今回のブラフ積み擁壁の場所としては私が一番推薦する場所の一つである。この高台については、田戸台の南側に位置していることから、海軍工廠の幹部住宅があったといわれている。地区の北西側、上町保育園から上がった地区及び佐野八幡神社周辺である。

大正4年の地図では、小道はあるもののあまり住宅は見られない。

(歴史的背景)

この地区は、北西側に柏木田地区が隣接する。柏木田遊郭は、明治中頃に下町から移転したものである。遊郭の衛生上の検疫所が現在の上町保育所にあった。

その上町保育所北側の階段から海軍工廠関係の住宅地帯に入ることができる。現在では、空き地も多く、いつブラフ積み擁壁が破壊されるが心配な地区である。



大正4年²⁰⁾

現在 国土地理院電子地図

図-6.12 佐野町地区の新旧地図

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては、全体で10カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は9カ所である。ブラフ積み擁壁がほとんど。逆に効率性を確保するためブラフ積み擁壁を中心に調べたため。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は9カ所ある。この地区の特徴として、全体がまとまりのあるブラフ積み擁壁群であることである。個人的主観となるがほとんど同時期に、住宅地造成及び地区内道路整備の一環として作られたと思われる。坂道以外の場所が多いが、住宅や公共用地確保のための擁壁があるためと思われる。この地区の特徴として、ブラフ積み擁壁の延長が非常に長いということである。延長30m以上の擁壁が、6割近い。長いものでは、80mに達する。また、目地にモルタルのあるものが0である。さらに施工が丁寧であり、保存状態もよい。

以上のことから、海軍工廠の幹部住宅として、全体に大規模に統一的にブラフ積み擁壁が計画され施工されたと推測できる。今後保存・活用すべきと考える「**ブラフ積み擁壁群地区**」である。

(おすすめの「**ブラフ積み擁壁**」) (写真-6.13) No.○は、巻末資料 A 地区番号 8 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として 3 カ所。佐野町 1 丁目のブラフ積み擁壁で、地区内の丘陵地入り口から佐野八幡神社への道の山側擁壁、No.2。丘陵の頂上付近の擁壁 No.5。地区入り口、上また保育園背後の擁壁 No.8。

No.2 は、地区内の丘陵地入り口から佐野八幡神社への道の山側擁壁であり、園長が 80m と非常に長い。これ程の延長のブラフ積みは、坂本の坂以外には見られない。きれいに施工され維持管理も行き届いている。

No.5.については、丘陵の頂上付近の擁壁であり、ひな壇形式の擁壁となっている。海軍工廠関係の住宅とすれば最も職位の高い住宅のための擁壁と思われる。

No.8 については、現在は上町保育園であるが、戦前は柏木田遊郭のための衛生上の検疫所だったと言われる。延長等今後詳細な調査が必要。



⑩豊島小学校 (図-6.13)

(地区の概要)

当該地区は、上町 4 丁目から上町 3 丁目に至る地区である。横須賀市民病院、三崎街道、不入斗公園に囲まれた丘陵地帯である。ルートとしては、鶴久保小学校交差点から北側に登り、豊島小学校に向かって降りるルートである。



大正 4 年の地図でも斜面に住宅が建っている様子がわかる。

(歴史的背景)

この地区も、明治以降、近辺に東京湾要塞司令部や陸軍練兵場があることから、住宅地として開発されたとと思われる。

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては、全体で 9 カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は 7 カ所である。効率性を確保するためブラフ積み擁壁を中心に調べたためブラフ積み擁壁がほとんど。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は、7カ所ある。この地区の特徴として、延長が30mを超えるものが2カ所あり、また10段以上の擁壁が4カ所あることである。また、坂道対応の擁壁が3/4であること。

以上のことから、当該地区は傾斜がある丘陵地であることから、ブラフ積み擁壁が大規模でかつ坂道の道路確保のための擁壁になったと思われる。

（おすすめの「ブラフ積み擁壁」）（写真-6.14） No.○は、巻末資料A 地区番号10 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として2カ所。豊島小学校南側丘陵の頂上から南側に下る坂道の擁壁部No.2。丘陵頂上から豊島小学校に周囲を下る坂道の擁壁部No.6。

No.2については、豊島小学校南側丘陵の頂上から南側に下る坂道の擁壁部。延長が40mと長く、15段積みで大規模。カーブを描くデザイン的にきれいな曲線の擁壁。残念なことに草が生え見にくい。

No.6については、丘陵頂上から豊島小学校に周囲を下る坂道の擁壁部。小学校の周囲の擁壁かつ中心通路の擁壁で、延長が50mと長く、11段積み。施工は丁寧。保存状態もよい。



⑪深田台（図-6.14）

（地区の概要）

当該地区は、旧深田村であり、戦前は、深田町であったが、昭和25年に深田台となっている。浦賀道、及び龍本寺への松並木だった参道及び文化会館に囲まれた地区である。浦賀道から坂道を登ってゆくと住宅地となる。方形な区画が整備された住宅地となっている。大正4年の地図においては、この地域は海軍病院となっている。一方東側には、住宅地が密集している。大正4年地図でも住宅が密集している。



（歴史的背景）

当地区は、明治13年に横須賀海軍病院が開院している。また、海軍病院北側及び東側には、東京湾要塞築城支部、米が浜砲台など陸軍施設もあった。大正12年の関東大震災において当地区は甚大が被害を受け、海軍病院は全焼している。関東大震災後、横須賀市と海軍との間で、「稲楠土地交換」が行われ、海軍病院は現在の米軍内土地に移り、海軍病院跡は市立病院と住宅地に区画整理がなされた。なお、市立病院は、昭和37年に火災に遭い西海岸に移り、跡地は文化会館になった。

（擁壁の特徴）

調査した擁壁としては全体で9カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は8カ所である。効率性を確保するためブラフ積み擁壁を中心に調べたためブラフ積み擁壁がほとんど。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は8カ所ある。この地区の特徴として、住宅地確保のための擁壁が2/3を占めている。関東大震災後の土地区画整理のためと思われる。石材の寸法比3以下が3カ所あること、目地にモルタルがあり、小口が突出しているものがほとんどであること。さらに、施工方法も丁寧で保存状態がよいものがほとんどある。

以上のことから、この地区のブラフ積み擁壁は、海軍病院に関連し公共として作られ、さらに関東大震災後に、土地区画整理として作られたことが特徴といえる。

(おすすめの「ブラフ積み擁壁」)(写真-6.15) No.○は、巻末資料A 地区番号11 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として2カ所。一つは、旧税務署から、文化会館へ向かって登る坂道の両側に作られたブラフ積み擁壁群。No.1.5.6. と 海軍病院と築城支部との境界部のブラフ積み擁壁 No.9。

No.1.5.6 については、文化会館に至る道であり、大正4年の地図にはないことから、区画整理事業によりできたと思われる。各々12~20mの延長でかつ、15~16段の擁壁であり、かなり大規模な擁壁群である。垂直に近い擁壁で丁寧に施工されている。



No.9については、大正4年の地図においても存在する道である。擁壁の施工時期は特定できない。この場所はかなり長い延長で擁壁が続いているが、場所によって積み方がかなり異なる。特に石材の寸法が場所により異なる。このため擁壁部については、公共で作られたというよりは、住宅所有者により施工されたと思われる。このことから、関東大震災後の施工とも考えられる。

⑫ 観音崎砲台 (図-6.15)

(地区の概要と歴史的背景)

東京湾要塞の一環として、観音崎周辺に設置された砲台群である。現在は、県立観音崎公園として公園になっている。砲台についても、公園内の周遊ルートとして設定されている。園地内の道路や道については、砲台時代の道路や道を利用している。園地内の砲台跡として、図に示すとおり、砲台が6カ所、堡塁が3カ所、計6カ所の砲台がある。また、各々の砲台の起工、竣工及び廃止の年を図-6.16に示す。²²⁾

古い順に(旧第3は除く)



図-6.15 観音崎砲台各砲台位置図²²⁾

観音崎(第2)明治 13 着工-明治 22 竣工-大正 14 廃止
 観音崎(第1)明治 13 着工-明治 27 竣工-大正 2 廃止
 観音崎(第3)明治 15 着工-明治 27 竣工-大正 14 廃止
 観音崎(第4)明治 13 着工-明治 24 竣工-昭和 20 廃止
 南門 明治 25 着工-明治 33 竣工-大正 14 廃止
 三軒屋 明治 27 着工-明治 28 竣工-昭和 9 廃止
 腰越 明治 28 着工-明治 35 竣工-大正 2 廃止
 大浦 明治 28 着工-明治 35 竣工-大正 2 廃止

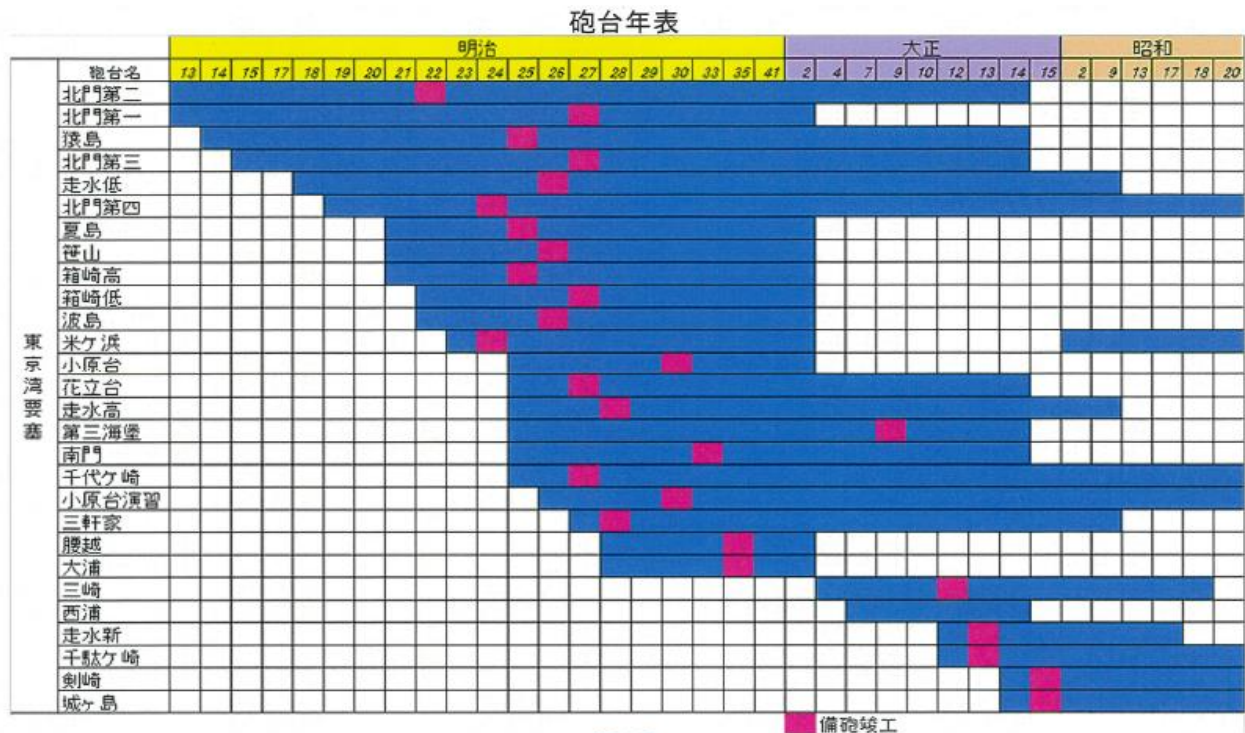


図-6.16 東京湾要塞各砲台の着工・竣工・稼働期間図²²⁾ 青:稼働期間

(擁壁の特徴)

調査した擁壁としては全体で 40 カ所ある。そのうちブラフ積み擁壁は 37 カ所である。効率性を確保するためブラフ積み擁壁を中心に調べたためブラフ積み擁壁がほとんど。ブラフ積み以外の谷積み、布積みの擁壁も多数存在する。特に、砲台以外の連絡道路、通路には布積み、谷積みがある。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ブラフ積み擁壁は 37 カ所ある。

全体的な特徴として、

- ・長手と小口の交互の一般的な「1+1」以外のブラフ積み擁壁が 2 割以上存在し、他地域に比較し多い。
- ・寸法比(長手／小口)が、3 以下、具体的には 2 程度が、95 パーセントとほとんどを占める。整備時期が明治及び陸軍による設計施工のためと思われる。ちなみに横須賀製鉄所のドライドックや護岸も寸法比はほぼ 2 である。
- ・目地にモルタルのあるものが 7 割以上であり、一方、小口が突出しているものはほとんど皆無である。

これも施工時期と設計・施工者の違いと思われる。

- ・施工が丁寧であり、保存状態もよい。

個別の特徴として

- ・三軒屋砲台、腰越、大浦堡塁は道路部のブラフ積み擁壁が多い。整備時期が明治後半のものであり、明らかに整備時期に特徴がある。
- ・南門砲台は海岸護岸にブラフ積み擁壁が見られる。非常に珍しい。
- ・第1. 第2. 第3 砲台では、砲台部においてブラフ積みと布積みの複合型が見られる。整備時期が明治前期のものであり、明らかに後期のものとの違いがある。また、ブラフ積みの段数も 10 段と後期のものと比較し段数が多い。

- ・第1. 第2. 第3 砲台では目地にモルタルは使われず、隙間がなく加工され、石材も、砂岩に近い。一方後期のものにはモルタルが使われ凝灰質礫岩となっている。
- ・なお観音崎地区ブラフ積み擁壁の中で、No.35 だけは民間の擁壁であり、他のブラフ積みとは全く異なる。

以上まとめると、表-6.3 の通りとなる。

表-6.3 横須賀市内のブラフ積み擁壁の比較

項目	観音崎 (第1, 第2, 第3)	三軒屋、南門 腰越、大浦	横須賀本港 (海軍)	その他軍関係	上町等民間
時代	明治前期	明治後期	明治前期	明治～昭和	明治～昭和
寸法比(長手/小口)	2	2	2	3	3
小口突出	なし	なし	なし	有り	有り
目地のモルタル	なしが多い	有り		有り	有り
施工	丁寧	丁寧	丁寧	丁寧	
ブラフ積みの場所	砲台等	道路、砲台、護岸等	ドック、護岸等	擁壁	擁壁
並べ方	1+1、複合	1+1	1+1	1+1	1+1.2+1.
石材質	砂岩、房州石	房州石	安山岩	房州石	房州石

（おすすめの「ブラフ積み擁壁」） No.○は、巻末資料 A 地区番号 12 の擁壁番号を表す

おすすめのブラフ積み擁壁として 4 カ所ある。三軒家砲台砲座脇の弾薬庫レンガ擁壁上部のブラフ積み擁壁 No.7。観音崎第 2、第 1 砲台横しょう石垣 No.23.No.30。南門砲台海岸護岸 No.32.No.33。高橋家護岸 No.35。

明治 20 年代に整備された三軒家砲台砲座脇の弾薬庫レンガ擁壁上部のブラフ積み擁壁 No.7.は、レンガ積みと石積みのハイブリッドである。焼きすぎレンガの上にブラフ積み 3 段積まれている。石材表面は、「雪平たたき」を思わせる叩き跡がある。他のブラフ積みの表面加工とは明らかに異なる。表面は灰白色で他のブラフ積み擁壁とは異なる。施工は至って丁寧で保存状態もよい。(写真-6.16)

明治 10 年代に整備された観音崎第 2、第 1 砲台横しょう石垣 No.23、No.30 は、他のブラフ積み擁壁とかなり異なる。まず石材の色が黄色みかかっている、砂岩のようである。他は凝灰岩礫岩な



写真-6.16 No.7 三軒家砲台



写真-6.17 No.23 第 2 砲台 No.30 第 1 砲台

ので外観が大きく異なる。1段ごとにブラフと布積みが交互になっている。これは他に見られない特徴である。加工は丁寧で隙間がなく、モルタルには使われていない。風化が激しい保存が必要である。また、隅角部の石材については、石材厚が他の石材の2倍となっている。これは大きな特徴である。(写真-6.17)

明治20年代に整備された南門砲台海岸護岸 No.32、No.33 は非常に珍しい。房州石により整備された海岸護岸はここと次の高橋家護岸のみである。さらに No.33 の護岸については延長が、50m と非常に長い。No.33 の構造が上部と下部で違うことも非常に珍しい。上段は、ブラフ3段、長短比3、サイズ20×25。下段は、ブラフ4段、長短比2、サイズ28×60。つまり、下段は明治期、上段は大正期施工と想像できるが、時代の違いか、技術の違いか、目的の違いか不明。どちらも浸食が非常に激しいので早急な保存が望まれる。No.32 の隣接する護岸は近年コンクリート護岸に再整備されているので景観に配慮も必要である。(写真-6.18)



No.32.



No.33

写真-6.18 南門砲台 海岸護岸

当地区唯一の民間海岸護岸である No.35 は、たたら大橋から見える延長60mの立派なブラフ積み海岸護岸である。ブラフ6段、長短比3.5 サイズ25×23、ブラフ積上1段布積み、さらに上1段ブラフ、ブラフ積下部は布積みが2段とかなり複雑な構成であり、多分大正期の施工と思われる。(写真-6.19)



写真-6.19 No.35 民間海岸護岸

⑬軍関係施設

観音崎砲台以外の軍関係施設のブラフ積み石垣について記述する。

A.米軍基地内旧横須賀造船所護岸及びドライドック(写真-6.20)

(地区の概要と歴史的背景)

幕末フランスの技術協力で整備された横須賀製鉄所ドライドック及び護岸である。整備としては明治初期に該当する。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

ドライドックと護岸の擁壁については横須賀市内のブラフ積みと大きく異なる。相違点は2つあり、石材が凝灰質礫岩ではなく、伊豆石つまり安山岩であること。加工しやすさより強度を重視した結果である。2つ目は石材の長短比が2であること。明治中期以降のブラフ積みはほぼ3である。

(その他)

なお、米軍基地内には、ブラフ積みが多数存在する。2017年の「近代化遺産・近代遺跡調査概報集」7)によると以下のとおり。



写真-6.20 内港地区ドライドック及び護岸

①内港地区ドライドック及び護岸(安山岩 紹介済み)、②楠が浦地区海兵団前面海域突堤(コンクリート製)、③楠が浦地区海兵団前面上陸場護岸(コンクリート製)、④楠が浦地区海兵団前面短艇釣り護岸(コンクリート製)、⑤新井掘割護岸(凝灰岩)、⑥東倉庫水が尻護岸(コンクリート製)、⑦旧湿が谷官舎地区擁壁(凝灰岩 長短比 1/3)、⑧旧横須賀海軍工廠長官舎付近(大谷石? 長短比 4 1+2)、

古い順に並べると、①→⑤⑦→⑧②③④⑥とおもわれる。

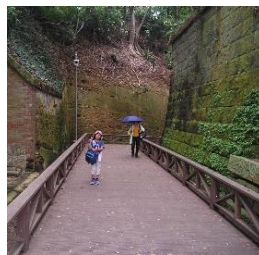
B.猿島 (写真-6.21)

(地区の概要と歴史的背景)

猿島は陸軍により明治 14 年に起工され明治 25 年に竣工した。大正 14 年に廃止になっている。猿島には 3 か所ブラフ積み擁壁がある。切通し部の擁壁である。ブラフ積みも含め詳細は、横須賀市文化財調査報告書 51 号²²⁾に詳しい。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

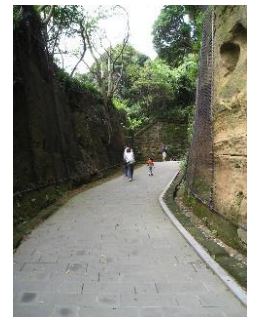
ブラフ積みについては 3 種類ある。古いものは、第 1 砲台跡塁道掩蔽部、第 2 砲台跡塁道東側被覆壁である。明治 16-17 年に整備され、凝灰質礫岩で、長短比 2 である。次に、第 2 砲台跡塁道西側被覆壁である。明治 30 年代以降の整備で、凝灰質礫岩で、長



a.東側被覆部



b.西側被覆部



c.歩道部

写真-6.21 猿島切通し部

短比 3 である。最後に切通し部歩道であり、公園整備に伴い整備されている。長短比は 2。一つの砲台でこれまでブラフ積み課の様式が異なるのも珍しいらしい。

C.千代ヶ崎砲台・砲塔砲台 (写真-6.22)

(地区の概要と歴史的背景)

千代ヶ崎砲台は陸軍により明治 25 年に着工し 28 年に竣工した。また、千代ヶ崎砲塔砲台は、大正 13 年に起工し翌 14 年に竣工した。ブラフ積みも含め詳細は、横須賀市文化財調査報告書 51 号²²⁾に詳しい。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

千代ヶ崎砲台と千代ヶ崎砲塔砲台のブラフ積みは明らかに異なる。千代ヶ崎砲台のブラフ積みは、凝灰質礫岩で、長短比 2 である。一方、千代ヶ崎砲塔砲台のブラフ積みは、凝灰質礫岩で、長短比 3 である。大正時代の整備であり、横須賀市内全般に見られるブラフ積みとなっている。



a.千代ヶ崎砲台



b.千代ヶ崎砲塔砲台

写真-6.22 千代ヶ崎砲台

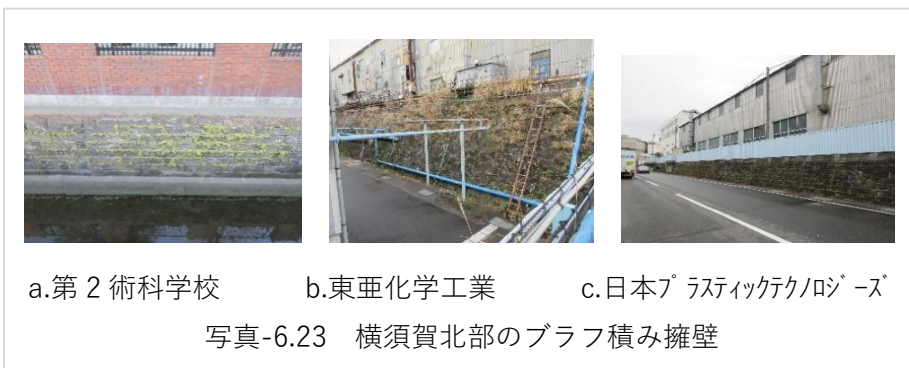
D.横須賀北部(第 2 術科学校(旧水雷学校)、東亜化学工業・日本プラスチックテクノロジーズ(海軍航空技術廠)) (写真-6.23)

(地区の概要と歴史的背景)

水雷学校の田浦への移転は明治 37 年。また、大正以降航空技術廠浦郷地区に集中立地した。各々埋め立て護岸や造成地擁壁となっている。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

各々埋立て護岸や造成地擁壁となっている。特徴として、延長が長く大規模となっていることである。ブラフ積みは横須賀の擁壁において民間で広範囲に施工される中、明らかに海軍によりブラフ積み施工された数少ない事例である。凝灰質礫岩、長短比3である。



a.第2術科学校 b.東亜化学工業 c.日本プラスチックテクノロジーズ
写真-6.23 横須賀北部のブラフ積み擁壁

E.海軍水道走水トンネル (写真-6.24)

(地区の概要と歴史的背景)

明治9年着工15年開通の海軍水道トンネルである。走水から横須賀製鉄所まで。横須賀市内で自動車が走れる最古のトンネル。

(ブラフ積み擁壁の特徴)

明治前期の構造物のため凝灰質礫岩で、長短比2である。



写真-6.24 走水トンネル

6. 4. 地区ごとの比較

以上、横須賀市内のブラフ積み擁壁調査の各地区の分析を示した。各地区の「ブラフ積み擁壁」集計表を表-6.4に示す。各調査項目について、各地区のブラフ積みの割合が横須賀地区内の平均(小計①)と比較し大きい場合にグレーに塗りつぶしている。わかることは以下の通り。

- ・公共施設などが少ない地域では「1+1」以外の石材は配置のブラフ積みが多くなっている。
- ・公共関係の施設が多い地区は施工が丁寧で保存状態も良い。

軍施設との比較すると軍施設の方が延長、段数とも大規模なものが多い。開発主体による差だと思われる。寸法比が<3の割合が多い。明治前半の施設があるからと思われる。

表-6.4 各地区の「ブラフ積み擁壁」集計表

地区番号	地区名	調査数	ブラフ数	1+1以外	宅地目的	坂以外	傾斜擁壁	段数>10	延長>30m	寸法比>4	寸法比<3	大谷石	目地あり	小口突出	施工丁寧	保存度良	軍公共
No.1	若松・深田	23	16	6.3	18.8	25.0	43.8	37.5	6.3	0.0	12.5	0.0	18.8	62.5	31.3	6.3	
No.2	上町	20	17	41.2	52.9	52.9	41.2	29.4	17.6	23.5	5.9	0.0	11.8	35.3	11.8	23.5	
No.3	浦賀道①	23	9	33.3	33.3	44.4	44.4	11.1	11.1	11.1	11.1	0.0	11.1	22.2	33.3	22.2	
No.4	浦賀道②	28	12	8.3	0.0	16.7	58.3	33.3	16.7	0.0	0.0	0.0	58.3	58.3	58.3	41.7	○
No.5	汐入逸見	14	6	33.3	50.0	50.0	33.3	50.0	16.7	16.7	0.0	0.0	83.3	50.0	33.3	16.7	
No.6	汐入坂本	13	6	16.7	66.7	50.0	50.0	33.3	16.7	33.3	0.0	0.0	83.3	83.3	33.3	33.3	
No.8	田戸台	20	19	5.3	26.3	47.4	68.4	36.8	0.0	5.3	0.0	0.0	68.4	78.9	52.6	26.3	○
No.9	佐野	10	9	0.0	33.3	22.2	55.6	33.3	55.6	11.1	0.0	0.0	0.0	66.7	66.7	66.7	○
No.10	豊島小学校	9	7	14.3	57.1	28.6	71.4	57.1	28.6	14.3	0.0	0.0	42.9	57.1	57.1	14.3	
No.11	深田台	9	8	12.5	62.5	25.0	25.0	75.0	0.0	12.5	37.5	0.0	100.0	87.5	87.5	75.0	○
小計①		169	109	16.5	35.8	36.7	50.5	37.6	14.7	11.0	6.4	0.0	43.1	59.6	44.0	30.3	
No.12	観音崎砲台	40	37	21.6	0.0	0.0	5.4	24.3	5.4	0.0	94.6	0.0	70.3	5.4	91.9	67.6	○
No.13	軍	11	11	0.0	0.0	0.0	36.4	45.5	45.5	18.2	45.5	9.1	100.0	45.5	100.0	90.9	○
小計②		51	48	16.7	0.0	0.0	12.5	29.2	14.6	4.2	83.3	2.1	77.1	14.6	93.8	72.9	
合計		220	157	16.6	24.8	25.5	38.9	35.0	14.6	8.9	29.9	0.6	53.5	45.9	59.2	43.3	
No.7	横浜山手	40	40	12.5	40.0	30.0	35.0	45.0	32.5	20.0	7.5	17.5	37.5	5.0	50.0	45.0	

No.1-No.131.No.7については、「小計①」の平均より高いもの

また、各地区の集計表を素に特徴をまとめると表-6.5の通りである。

6. 5. 他都市との比較 横浜

他都市との比較として横浜山手との比較をする。集計表(表-6.4)からわかることは以下のとおりである。

- ・横浜山手は、横須賀に比較し延長・段数とも大規模のことが多い。横浜山手は居留地として大規模に開発され、一方横須賀の場合は、民間による谷戸や斜面の小規模開発の結果だと思われる。

- ・横浜山手は明治前半の地区に整備された地区ではあるが、長短比<3の割合が横須賀に比較し少ない。横須賀の場合は、明治前半は軍によるブラフ積みが多く、大半は長短比=2である。長短比=>3となるのは横須賀の場合明治中期以降であり、民間による開発の場合である。

- ・小口突出は、横浜山手ではあまり見られないが、横須賀の民間開発の部分で多く見られる。
- ・保存状態では、横浜山手のほうが横須賀に比較し全般に保存状態がよい。横浜山手においては、景観形成ガイドラインに見られるように、ブラフ積みを保存、もしくは、ブラフ積みという景観を残しつつ改修しているためと思われる。

歴史的に見ると横浜山手のブラフ積みは明治時代前期のものが存在する。一方横須賀の場合、同様なブラフ積みは民間においてみられ、明治後半からと思われる。

このことから、横浜山手でのブラフ積みが横須賀課の民間でのブラフ積み施工に技術が引き継がれていることが推測される。

6. 6. 年代ごとの比較 明治初め、中期、後期、大正、震災、昭和

以上各地区の分析と集計表をもとに、横須賀市内の調査範囲内で特徴のある各地区及び年代との比較をすると表-6.6の通りとなる。表からわかることは以下の通り。

- ・横須賀市内のブラフ積みは、時代的に、明治期の陸軍東京湾要塞砲台群、明治前期の製鉄所及び海軍関係、明治後半からのその他の軍関係、民間開発等に分けられる。

- ・寸法比については、明治期の軍関係の長短比=2のグループと、長短比=3のグループに分けられる。注意が必要なのは、軍施設の場合、明治30年を境にしてそれ以降のブラフ積みは長短比=>3となっている。猿島、水雷学校、航空技術廠などである。民間についてはほとんどが長短比>=3。

- ・ブラフ積みの小口突出は民間構造物に多く一方、施工は軍関係が丁寧。
- ・目地のモルタルの有無については、観音崎の前期砲台軍以外はある場合が多い。
- ・材質については、横須賀製鉄所を中心とする施設は圧縮や浸食に強い安山岩であるが、それ以外は加工しやすい凝灰質礫岩(房州石? 砂岩?)である。

表-6.5 各地区の「ブラフ積み擁壁」の特徴

番号	地区名	地域の性格	ブラフ積みの特徴
①	若松町・深田台	住宅	坂道・宅地目的も併せ持つ石垣。 裏坂
②	上町	住宅	宅地用のものが多く、様式が多数
③	浦賀道(逸見-汐入)	主要道	宅地用の擁壁が多い。 稲荷山の坂
④	浦賀道(汐入-横須賀中央)	主要道	浦賀道沿いの擁壁が主。長源寺坂。汐入小
⑤	汐入-逸見の谷戸	住宅	宅地用が多い。段数が多い・高い
⑥	汐入-坂本の谷戸	住宅・陸軍	宅地用が多い。 坂本の坂
⑧	田戸台	住宅・公共施設等	宅地用、公共施設の石垣多い。どうきみ坂
⑨	佐野町	住宅	宅地、道路確保の石垣。 延長長い。一押し
⑩	豊島小学校	住宅	宅地、道路確保の石垣。 段数多く、延長長い
⑪	深田台	海軍病院	海軍病院、区画整理による石垣。 大規模
⑫	観音崎	東京湾要塞	砲台及び通路のため。寸法が異なる
⑬	横須賀軍関係・その他	千代ヶ崎砲台、海軍工廠等	陸軍、海軍、時代により特徴
横浜	横浜山手	外国人居留地	宅地用が多い。 段数多く・延長長い

表-6.6 横須賀市内の地区別・目的別ブラフ積みに関する比較表

項目	観音崎 (第1, 第2, 第3)	三軒屋、南門 腰越、大浦	横須賀本港 (海軍)	その他軍関係	上町等民間
時代	明治前期	明治後期	明治前期	明治～昭和	明治～昭和
寸法比(長手/小口)	2	2	2	3	3
小口突出	なし	なし	なし	有り	有り
目地のモルタル	なしが多い	有り		有り	有り
施工	丁寧	丁寧	丁寧	丁寧	
ブラフ積みの場所	砲台等	道路、砲台、護岸等	ドック、護岸等	擁壁	擁壁
並べ方	1+1、複合	1+1	1+1	1+1	1+1.2+1.
石材質	砂岩、房州石	房州石	安山岩	房州石	房州石

また、横須賀のブラフ積みの時代的変遷をまとめると図-6.17の通りとなる。特徴をまとめると以下の通りとなる。

- ・横須賀の住宅地のブラフ積みは横浜山手の技術を引き継いでいる。
- ・軍関係は、長短比=2であるが、明治後期以降は、住宅地等と同じとなる。
- ・石材質は、横須賀製鉄所だけが異なる。
- ・昭和に入り特に戦後の開発では大谷石が使われ、小口の配列パターンとして「2+1」が見られる。

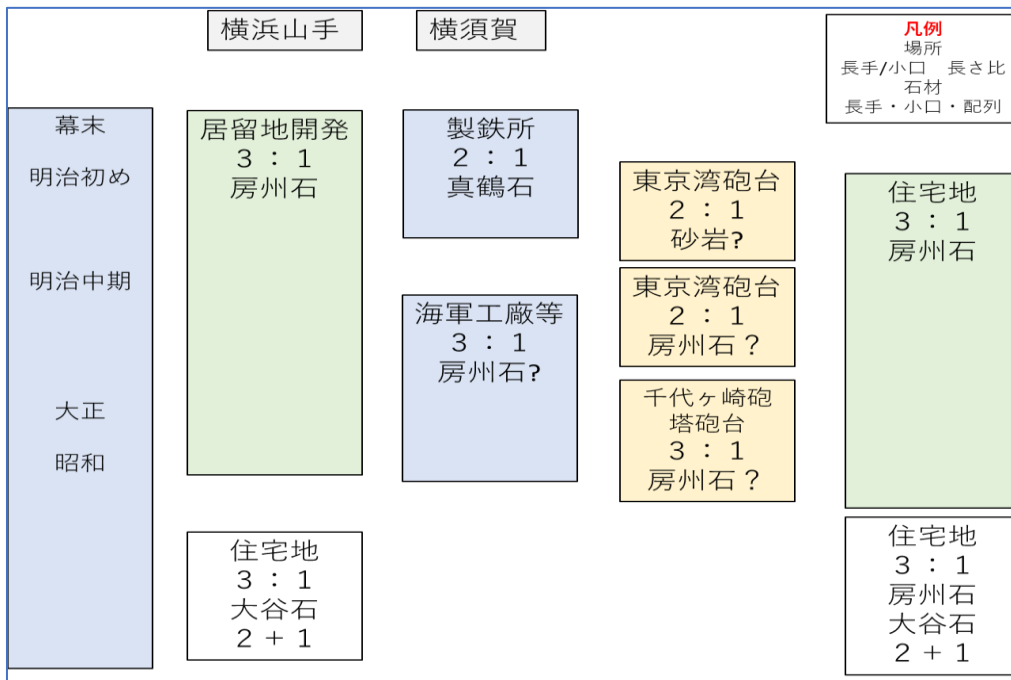


図-6.17 横須賀のブラフ積みの時代的変遷

6. 7. 土地利用ごとの比較 軍、公共、民間、道路、住宅

土地ごとの比較については、住宅口等民間と軍関係については、6.4 6.5 6.6 に説明した。横須賀の民間のブラフ積みは横浜山手の系統を引き継いでいる。また、横須賀製鉄所(海軍の明治初期)ブラフ積みは安山岩であり、利用目的は必要強度、耐久性等で材質が異なる。全般にブラフ積みにおいては、加工性がある石材(凝灰質礫岩)が主流である。

6. 8. 「海と船が見える坂道」との関係

これまでの横須賀に関する研究として「海と船が見える坂道」について現地踏査し分布などを調べた。今回横須賀市内のブラフ積みに関し現地調査した結果、「海と船が見える坂道」にブラフ積み擁壁があるパターンは少なかった。その理由として以下の理由が挙げられる。しかしながら、海岸線沿いに海食崖に多数存在する「海と船が見える坂道」とその奥に存在する「ブラフ積み擁壁」を有機的につなぐことにより観光コース、街歩きコースによることは可能である。

- ・「海と船が見える坂道」については、北部は追浜から南部は浦賀、久里浜、野比までの海岸と谷戸との境界、海食崖等の戦前の住宅地、戦後の住宅地開発地に集中しているのに対し、住宅地の「ブラフ積み擁壁」については、海岸線より奥の谷戸及び歴史的に明治から昭和初期にかけて開発された上町地区(逸見から佐野)の住宅地に集中しているため。
- ・特に、戦後の住宅地開発の中でできた「海と船が見える坂道」が多いため一致しない。
- ・ブラフ積みの多い上町は、横須賀の海軍工廠及び鎮守府による人口増加に対応し民間により開発された谷戸の宅地が多いため。

7. 地域資源としての「ブラフ積み擁壁」に関する提案

横須賀の「ブラフ積み擁壁」について現地調査・分析し、他都市との比較、「海と船が見える坂道」との関係検討等を行ったうえで、「ブラフ積み擁壁」の地域資源としての価値と活用に関する提案を行う。

7. 1. 横須賀の「ブラフ積み擁壁」の現状（保存状況等）

（保存の現状と将来）

横須賀の「ブラフ積み擁壁」調査を行った結果、横須賀には、横浜山手のブラフ積み擁壁の推定数 120 か所を上回る 157 か所の「ブラフ積み擁壁」が確認された。この事実は非常に重要である。一方で現地調査を行っている間にも、確認した「ブラフ積み擁壁」が解体され、コンクリート擁壁に再整備される事例が見られる。擁壁の技術上の基準上、既定の高さを超える擁壁については、「ブラフ積み擁壁」は認められない。これから将来も「ブラフ積み擁壁」は加速度的に解体されることが予想される。

（「ブラフ積み擁壁」の重要性）

幕末以降、横須賀製鉄所をアイデンティティーとして発展した横須賀において「ブラフ積み擁壁」は、歴史的、都市景観的に重要な構造物である。今後ともぜひ残すべき構造物である。

7. 2. 「ブラフ積み擁壁」と「海と船が見える坂道」の地域資源としての可能性

現在横須賀市においては、横須賀への来訪者、定住者を増やすべくルートミュージアム構想を進めている。ルートミュージアム構想においては、ヴェルニー公園内にビジターセンターとして「近代化遺産ガイダンスセンター」を中心に市内に「サテライト」を置き、周遊を目指すものとなっている。

点を結ぶ線として、図-7.1 に示すとおり、「海と船が見える坂道」と「ブラフ積み擁壁」を船における景観・歴史としての地域資源として活用することを提案する。

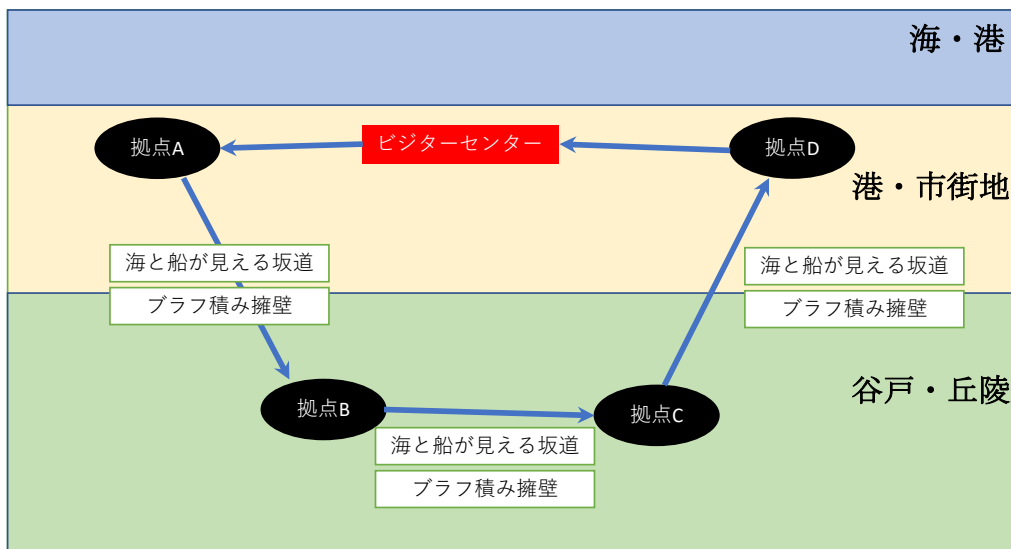


図-7.1 「海と船が見える坂道」「ブラフ積み擁壁」を活用したルートミュージアム

その場合、テーマ性を持ったルートミュージアムルートを設定する必要がある。地域、歴史、景観、文化等を考慮し、「ブラフ積み擁壁」や「海と船が見える坂道」を含むルートミュージアム「横須賀案内」を表-7.1 に提案する。

各々のルートを表-7.2 に示す。ガイダンスセンターを訪問した後、京急電車でも出発地の駅に行き、そ

のあと歩いて横須賀の歴史と景観文化を堪能するルートである。太字は、拠点・サテライトであり、黒字が線となる。

表-7.1 ルートミュージアム「横須賀案内」

提案コース
①浦賀道・横須賀港満喫ゴールデンルート
②横須賀北部・海軍工廠・空技廠地帯探訪ルート
③陸軍横須賀内陸部探訪ルート
④横須賀「ブラフ積み」石垣探訪ルート
⑤横須賀戦後住宅地散策ルート
⑥東京湾要塞・ブラフ積み探訪ルート
⑦交易・造船の町浦賀湾ぐるっとルート
⑧横須賀雰囲気実感満喫ルート（居酒屋・角打ち編）

表-7.2 各ルートの構成（サテライトとルート）

提案コース	ルート構成（太字;サテライト・拠点）
①浦賀道・横須賀港満喫ゴールデンルート	横須賀中央駅→どぶ板→軍港巡り→案内所 →浦賀道(稲荷山の坂・ブラフ積み→見晴らし山→一国坂 →汐入→ヒデヨシ→ブラフ積み・汐入小→谷町の坂 →小屋の台→ブラフ積み→うぐいす坂) →平坂→ 横須賀ベーカリー → 中央酒場 →横須賀駅
②横須賀北部・海軍工廠・空技廠地帯探訪ルート	追浜駅→平六トンネル→浦郷坂道→つきこや→ 海軍官修墓地 → 深浦海軍空技廠地帯 ・ ブラフ積み → 深浦ボートパーク → 梅田トンネル → 長浦海自基地 → 東芝ライテック →港ヶ丘三浦アルプス入り口展望台 → 盛福寺トンネル →海軍水道→ 海軍倉庫地帯 → ひょうトンネル → 田浦駅トンネル群 →田浦駅
③陸軍横須賀内陸部探訪ルート	逸見駅→坂本に抜ける坂→ 坂本トンネル →坂本の坂・ブラフ積み→ 突貫団子 → 重砲兵連隊 →ちこく坂→長源寺坂・ブラフ積み→中里トンネル→陸軍道路→ 浜田屋パン → 上町(看板建築) → 東京湾要塞司令部跡 →聖徳寺坂→ 県立大学駅 ・ 山崎屋酒店
④横須賀「ブラフ積み」石垣探訪ルート	汐入駅→ 軍港巡り ・ブラフ積み→ ブラフ積み ・ 汐入小 →谷町の坂→小屋の台→ブラフ積み→うぐいす坂→平坂→ ブラフ積み ・ 海軍病院跡 ・ 博物館 ・ 中央公園 →聖徳寺坂 → 長官邸 →田戸台・ブラフ積み→佐野町・ブラフ積み →どうきみ坂→ 県立大学駅 → 山崎屋酒店 ・ 中央酒場
⑤横須賀戦後住宅地散策ルート	馬堀海岸駅→ 馬堀海岸 →矢の津坂→ 安房口神社 →桜ヶ丘の大坂→ 桜ヶ丘団地 →桜ヶ丘の坂道→ 大津の丘団地 →大津駅→ 山崎屋酒店 ・ 中央酒場
⑥東京湾要塞・ブラフ積み探訪ルート	馬堀海岸駅→ 横須賀美術館 → 観音崎砲台群 ・ ブラフ積み → たたら浜 → 鴨居港 →鴨居港の坂道→浦賀駅・ 浜田分店パン → 中央酒場
⑦交易・造船の町浦賀湾ぐるっとルート	馬堀海岸駅→防大への坂・富士山→二葉町→東浦賀の坂→ 浜田分店パン → 浦賀ドック →渡し→ 東叶神社(恵仁志坂、産霊坂) →渡し→ 西叶神社 →東福寺の坂→ 愛宕山 → 鏝絵 →軍道の坂→ 川間ドック → 灯明堂 →砲台の坂→ 千代ヶ崎砲台 →久里浜駅・ 小善酒店
⑧横須賀雰囲気実感満喫ルート（居酒屋・角打ち編）	お多幸・ 中央酒場 ・ 相模や ・ 銀次 ・ 天国 ・ ヒトモト →三笠通→ 興津や →どぶ板通り→ 一福 ・ 柏木田酒店 ・ ヒデヨシ

①のルートについて具体的に地図に記入したのが図-7.2 である。



図-7.2 ①浦賀道・横須賀港満喫ゴールデンルート

7. 3. 「ブラフ積み擁壁」の保存と活用方法の提案 横浜事例

ルートミュージアム構想を実現するためには、「ブラフ積み擁壁」を保存活用することが重要である。そのためには、都市・景観行政の関与が重要である。方法としては、横浜市 of 事例を参考に、「横須賀市上町地区景観形成ガイドライン(仮称)」を策定し、その中で、ブラフ積み擁壁の保存、景観保全さらには、活用・創造を規定し、支援策を検討することを期待する。

8. まとめ

本研究において得られた成果としては以下のとおりである。

(資料文献調査)

- ・「ブラフ積み擁壁」に関する既往の研究を調査した。その結果体系的網羅的になされた研究は存在しない。横浜山手には「ブラフ積み擁壁」マップはあるが横須賀には存在しない。
- ・戦前の絵葉書においてブラフ積み擁壁が移っている絵葉書が三浦半島を対象に存在する。明治40年以前に河川護岸においても使用されていた。
- ・「ブラフ積み擁壁」の景観保全については、横浜市が先進都市であり、ガイドラインが策定されている。

(横須賀現地地調査分析)

- ・横須賀市上町地区を中心に初めて網羅的に現地調査し、現地デジタル写真、グーグルマップも利用し、「ブラフ積み擁壁」マップを作成し、調査項目の分析を行った。
- ・横須賀市においては、少なくとも157か所あり、山手地区よりも多いことが分かった。
- ・各地区においてかなり特性が違うことが判明した。
- ・横須賀における年代別、利用別「ブラフ積み様式」の特徴、系統を整理した。
- ・横須賀の軍関係のブラフ積みは、明治前期の長短比=2、明治中期以降の軍関係、民間擁壁は長短比=3となり、横浜山手と同じになる。

- ・石材については、横須賀製鉄所(安山岩)を除いて凝灰質礫岩であることが分かった。
- ・東京湾要塞観音崎砲台においても、前期と後期で公式がかなり違うことが分かった。前期は変則的積み方。砂岩である。
- ・軍関係と民間とを比較すると軍の方が施工が丁寧で保存状態がよい。

(他都市との比較)

- ・旧鎮守府都市の石垣については、横須賀は「ブラフ積み擁壁、凝灰質礫岩」、呉は「谷積み、花崗岩」、佐世保は「布積み、安山岩」が多いことが分かった。

(地域資源との活用)

- ・「海と船が見える坂道」と「ブラフ積み擁壁」とは分布域は一致していない。一方で海岸線からの距離で見るとつながりがある。
- ・両者はルートミュージアム構想において活用できる。
- ・横須賀案内としてモデルコースを提案した。

参考文献

- 1)吉田秀樹,2015:みなとまちの地域資源である「海と船が見える坂道」に関する研究,国土技術政策総合研究所資料第 879 号
- 2)吉田秀樹,2016:港町の地域資源である「海と船が見える坂道」の特性に関する一考察,日本沿岸域学会 2016 年度「研究討論会」
- 3)国土交通省河川局河川環境課,河川の景観形成に資する石積み構造物の整備に関する資料,1996:,pp2-3
- 4)横浜市教育委員会,1987:横浜山手－横浜山手洋館群保存対策調査報告書,pp7-9,pp81-823)
- 5)横浜市歴史的資産調査会,1988:都市の記憶－横浜の土木遺産,
- 6) 水野信太郎,1986: 日本近代における組積み造建築の技術的研究
- 7)横須賀市教育委員会,2017: 横須賀市文化財調査報告書第 54 集 近代化遺産・近代遺跡調査概報集,pp31-375)
- 8)横浜市歴史的資産調査会,2013:山手の西洋館 外国人居留地の歴史的景観
- 9) 横浜市都市整備局都心再生課,2015: 山手地区のブラフ積み擁壁 別図
- 10) 横浜市都市整備局,2019: 山手地区都市景観形成ガイドライン,p32.p44
- 11) 横浜市.2020: 横浜市景観計画（変更にかかる部分） 山手地区
- 12)安池尋幸ら,2000:横須賀市東逸見町所在石造暗渠調査報告,横須賀市博物館研究報告,第 44 号,
- 13)横須賀市自然・人文博物館,2003:横須賀市内近代化遺産総合調査報告書
- 14)菊池勝弘,2005:横須賀製鉄所・造船所とその更新施設における近代建築技術の導入及びその技術史的展開に関する研究
- 15)野内秀明ら,2007:東京湾要塞観音崎砲台跡の現存遺構,市史研究横須賀第 7 号
- 16)森洋子,ブラフ積みといわれる石積みから見た宅地形成過程を見る-横須賀市田戸台を中心に-
- 17)双木俊介,2014:軍都都市横須賀における宅地開発の進展と海軍士官の居住特性,歴史地理学野外研究 第 16 号,pp1-20
- 18)北海道,勝納川を考える会資料
- 19)中央地域文化振興懇話会,2001:横須賀中央地域町の発展史,p30
- 20)横須賀市:1915:第 1 回横須賀市統計書付録
- 21)中央地域文化振興懇話会,2003:横須賀中央地域 町の発展史 2－内陸部江南。上町地域の発展
- 22)デビッド佐藤,東京湾要塞砲台マップ: <http://tokyowanyosai.com/yousai/oldmap.html>
- 23)横須賀市教育委員会,2014: 横須賀市文化財調査報告書第 51 集 東京湾要塞跡 猿島砲台跡 千代ヶ崎砲台跡

- 巻末資料-A 横須賀各地区 紀行文・ブラフ積み擁壁リスト・マップ
- 巻末資料-B 横須賀地区別擁壁・「ブラフ積み擁壁」データ
- 巻末資料-C その他地区のブラフ積み擁壁リスト・マップ